

読書メモ2018年1月号

塩野七生編『マキアヴェツリ語録』

(新潮社・2003年)(ハードカバー)ほか

やなぎさわかつひろ

柳沢克央 編

(信州・上田仮説サークル)

2018年1月27日(土), 1月例会用レポート

◇はじめに

昨年12月号までの「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校図書室蔵書。

年末年始休業は13連休をとることができ、とても充実した読書ができました。それでも、まだまだたくさん「課題図書」があります。これからも、しばらく本選びで悩む必要はないものと思われます。幸せなことです。私の中を情報がスムーズに流れるように「消化吸収」と「結晶化」とを進めていく予定です。

昨年の成果は色々ありますが、特に次の二点をもう一度、記録しておきます。

①増田伸夫さんが「宗教関係の本も守備範囲にちょっとだけ加えてみて」という宿題＝〈束縛〉を出してくれ、苦しくない範囲でこれに乗って見たお陰で、視野が拡大した。

②出口治明さん、島地勝彦さんの警咳に接することができた。

今年も、「七転び八起き学」〔12月14日(木)3時限目、1年2組「情報」の授業時間中に発案〕と並行して読書と思索とを進めていくつもりです。上田仮説サークルの皆さま、どうぞよろしくお願いたします。

◇前回、12月号で読んだ本

- ◎武田科学振興財団編『若き研究者へ贈る言葉』（非売品・2015年刊）
- ◎出口治明著『座右の書「貞観政要」』（KADOKAWA・2017年）（私物）
- ◎山本七平編『帝王学―「貞観政要」の読み方』（日経ビジネス文庫・2001年）（私物）
- ◎呉兢著・守屋洋訳『貞観政要』（ちくま学芸文庫・2015年）（私物）
- ◎佐々木常夫著『ビジネスに活かす「孫子」』（PHPビジネス新書・2017年）（私物）以上

◇読書記録または読書メモ（順不同）（下線は柳沢による）

◎塩野七生編著『マキアヴェッリ語録』（新潮社・2003年・単行本）（私物）

『君主論』、『政略論』等からエッセンスを抜粋した本。解説は全くついていない。どこを抜粋したかが、著者のメッセージであり、見識であるということ。手許に置いておき、ヒマなときにパラパラとページを繰って自分なりの教訓とするために有効か。五百年の風雪に耐えて現代に伝わるマキャヴェッリ（他の標記もあるが本書にしたがう）の言葉は重く、深い。次に私がインパクトを感じた文章を紹介する。

*

君主（指導者）たらんとする者は、種々の良き性質をすべてもち合わせる必要はない。しかし、もち合わせていると人々に思わせることは必要である。

いや、はっきり言うと、実際にもち合わせていては有害なので、もち合わせていると思わせるほうが有益なのである。

思いやりに満ちており、信義を重んじ、人間性にあふれ、公明正大で信心も厚いと、思わせることのほうが重要なのだ。

それでいて、もしもこのような徳（ヴィルトウ）を捨て去らねばならないような場合には、まったく反対のこともできるような能力（ヴィルトウ）をそなえていなければならない。

君主たる者、新たに君主になった者はことさらだが、国を守りきるためには、徳をまっとうできるなどまれだということを、頭にたたきこんでおく必要がある。

国を守るためには、信義にはずれる行為でもやらねばならない場合もあるし、慈悲の心も捨てねばならないときもある。人間性をわきに寄せ、信心深さも忘れる必要に迫られる場合が多いものだ。

だからこそ、君主には、運命の風向きと事態の変化に応じて、それに適した対応の仕方が求められるのである。また、できれば良き徳からはずれないようにしながらも、必要とあれば、悪徳をも行うことを避けてはならないのである。

君主の最も心すべきことは、良き状態での国家の維持である。それに成功しさえすれば、彼のとった手段は誰からも立派なものと考えられ、賞讃されることになるであろう。

思慮深い人物は、信義を守りぬくことが自分にとって不利になる場合、あるいはすでに為した当時の理由が失われているような場合、信義を守り抜こうとはしないし、また守りぬくべきではないのである。

もちろん、このわたしの考えは、人間がみな善人ばかりであったなら、無用になるであろう。だが、人間というものは愚劣でエゴイストが多いのが現実だから、あなたもまた、自分にとって最も良かれと思う方法で行動するしかない。

しかも、君主（リーダー）ならば、この“転向”の理由づけに役立つ材料には、事欠かないはずである。—『君主論』—（63 ペ）

（柳沢注：1月10日現在、韓国外務省が従軍慰安婦問題をめぐる「日韓合意」を反故にする発言をしているが、この文章に照らして、リアルな外交を展開しているという印象を持つ。さて、日本外務省はどう出るか…興味津々である）

*

次のことは明言しておきたい。

すなわち、危険というものは、それがいまだ芽であるうちに正確に実体を把握することは、言うはやさしいが、行うとなると大変にむずかしいということである。

それゆえはじめのうちは、あわてて対策に走るよりもじっくりと時間かせぎをするほうをすすめたい。

なぜなら、時間かせぎをしているうちに、もしかしたら自然に消滅するかもしれないし、でなければ少なくとも、危険の増大をずっと後に引きのぼすことは、可能かもしれないからである。

いずれの場合でも、君主ははっきりと眼を見開いている必要がある。

情勢分析を誤ってはならないし、対策の選択を誤ることも許されないし、対策実施のときも誤ってはならないのだ。

植木に水をやりすぎて枯らしてしまうようなことは、あってはならないのである。

しかし、こちら側の準備が万端と思うやいなや、迷うことなく断固として反撃に打って出るべきである。

反対に、その自信がないときには、まだしばらくは事の成行きにまかせるほうが良策と思う。—『政略論』—（95 ペ）（柳沢注：何と冷徹な思想だろうか）

*

わたしは、改めてくり返す。国家は、軍力なしには存続不可能である、と。それどころか、最後を迎えざるをえなくなる、と。……

もしも、あなた方が、なぜわれわれに軍事力は必要なのか、フィレンツェはフランス王の保護下にあるではないか、ヴァレンティーノ公爵チェザーレ・ボルジアだって、攻撃してくる怖れもないではないか、と言われるのなら、わたしはそのような考えほど軽率なものはないと答えよう。

なぜならすべての国家にとっては、領国を侵略できると思う者が敵であると同時に、それを防衛できると思わない者も敵なのである。君主国であろうと共和国であろうと、どこの国が今までに、防衛を他人にまかせたままで、自国の安全が保たれると思ったであろうか。—『提言』— (173 ペ)

*

なにかを為したいと思う者は、まずなによりも先に、準備に専念することが必要だ。機会の訪れを待っての準備開始では、もう遅い。幸運に微笑まれるより前に、準備は整えておかねばならない。

このことさえ怠りなくやっておけば、好機が訪れるやただちに、それをひっそらえてしまうこともできる。

好機というものは、すぐさま捕らえないと、逃げ去ってしまうものである。

—『戦略論』— (186 ペ)

*

世の中とは、所詮似たようなやり方で進むものなのである。良き性行も悪い性行も、たいして変わらない形で共存し続けるわけだ。

とはいえ、国によって風習が異なるように、国によってそのあわれ方もちがってくる。だが、人類全体から見れば、少しも変わらない。

しかし、良き性向「(ヴィルトウ) は、時代によって移動する」。かつてはアッシリアにあったそれが、次いではメディアに移り、その次はペルシアに、そしてその後も移動をつづけてローマに至り、ローマを隆盛に導いた、というわけである。—『政略論』— (188 ペ) (柳沢注:「ヴィルトウ」は色々な言葉に訳される。増田さんが謂うところの「勢い」にも相当する概念だと思う。いま、国際的な時代の「勢い」は明らかに中国にシフトしている。色々な統計データがそれを示している。あと 10 年もすれば誰の眼にも結果は明らかになると思う。人口のスケールが一ケタ違うということは大変なことだ)

*

変化なしの自然はありえないと同様、民族の運命にも、静止ということはある。最初のうちは上昇をつづける。それが頂点に達するや、他には下降しかありえないという簡単な理由で、下降がはじまる。

このようにして善は悪に変わり、他方では、悪が善に変わる。

力量（ヴィルトウ）は、精神と物質の両面ともで安らかさをもたらすが、しばらくすれば、この安らかさも安逸におちいり、まもなくそれは無秩序に変わる。

そして、無秩序は衰退につながり、破滅の瀬戸ぎわになるや、今度は誰かが目覚めて、秩序を回復させる。

秩序は力量をもつ者の登用につながり、これらの登用された人々に率いられて、再び繁栄が訪れるということになる。—『フィレンツェ史』—（190 ペ）

（柳沢注：「成功は成功のもと」→「成功は失敗のもと」→「失敗は失敗のもと」→「失敗は成功のもと」という流れが短い文章に見事に表現されている。これぞ古典の醍醐味だ）

*

次の二つのことは、絶対に軽視してはならない。

第一は、忍耐と寛容をもってすれば、人間の敵意といえども溶解できるなどと、思っ
てはならない。

第二に、報酬や援助を与えれば、敵対関係すらも好転させうると、思っ
てはいけない。

—『政略論』—（191 ペ）

（柳沢注：国の首脳や最前線にいる外交官は肝に銘ずべき。そして、これは一家の首脳・
外交官の立場にいると自認する者にとっても同じはずである）

*

人の為す事業は、動機ではなく、結果から評価されるべきである。—『政略論』—（191
ペ）（柳沢注：これは板倉式発想法の一つ、「結果主義」そのものだ）

*

人は、ほとんど常に、誰かが前に踏みしめていった道を歩むものである。先人が行っ
たことをまねしながら、自らの道を進もうとするものだ。

それでいながら、先人の道を完璧にたどることも、先人の力量に達することも、大変
にむずかしい。それで賢明な人は、踏みしめた道にしても誰のものでもよいとはせずに、
衆に優れた人物の踏みしめた道をたどろうと努め、そのような人の行動を範とすべきな
のである。たとえ力量ではおよばなくても、余韻にぐらいはあずかれるからだ。

言ってみれば、これは、慎重な射手のやり方である。的があまりにも遠すぎ、自分の
力ではそれに達するのが不可能と思った場合、射手は的を、ずっと遠いところに定める。
狙いを高く定めることによって、せめては的により迫ろうとするからである。—『君主
論』—（192 ペ）（柳沢注：ここにも「模倣と創造」に関する深い洞察が記されている。
後半は今の私には難解である。いま、言い換えるとすれば、「現実を超越する力を古典か
ら得るべし」ということであろうが…）

*

長期にわたって支配下におかれ、その下で生きるのに慣れてしまった人民は、なにかの偶然でころがりこんできた自由を手にしても、それを活用することができない。活用する術を知らないのだ。

動物園で飼われた猛獣に似て、原野に放たれてもどう生きていくかを知らないので、簡単に再び捕獲されてしまう。

支配に慣れた人民も自分の頭で考え行動するのに慣れていないために、何が自分たちを守るかがわからないのだ。かといって、彼らを引っぱって来ていた人も追い出してしまった以上、他に方策もない。

それで結局、遅かれ早かれ、以前よりは過酷な状態を甘受するしかなくなるのである。—『政略論』— (199 ペ) (柳沢注：「どっちに転んでも属国」〔山本夏彦〕にならないようにしたいものだ)

*

ある人物を評価するに際して最も簡単で確実な方法は、その人物がどのような人々とつきあっているかを見ることである。

なぜなら、親しくつきあっている人々に影響されないですむ人など、ほとんど皆無と言ってよいからである。—『政略論』— (211 ペ) (柳沢注：これはよく諺のように言われていることだが、出典がマキャヴェッリにあったとは知らなかった)

*

誰でも、なるべくならば容易にものごとを処理したいと願うものである。

だが同じことでもたやすく実現できる人と、大変な苦勞をした末にしか実現できない者に分かれるのも事実である。

その原因は、あらかじめできている準備を、訪れたその機に投入すべきかまたはしないほうがよいかを見きわめる判断力にあると思う。

なんでもかでも、全力投球さえすれば成功するとはかぎらないのだ。

この際の判断力の良し悪しが、その人の人生がスムーズに行くか、それとも大変な苦勞に満ちたものになるかの、分かれ道であると思う。—『戦略論』— (216 ペ) (柳沢注：とても「深い」)

*

軍の指揮官にとって、最も重要な資質はなにかと問われれば、想像力である、と答えよう。

この資質の重要性は、なにも軍の指揮官にかぎらない。

いかなる職業でも、想像力なしにその道で大成することは不可能だからである。

—『戦略論』— (216 ペ) (「想像力」はすなわち、「映像化」である。具体的に、まるで見てきたようにイメージすることが大切だ)

*

マキャヴェッリから学ぶべきことをひとことと言うと「何事も元気が大事」ということであると思った。これぞ古典の神髄という印象が深い。

◎隈元信一著『永六輔』(平凡社新書・2017年)

著者は1953年、鹿児島県生まれのジャーナリスト。朝日新聞記者が主要な経歴。

昨年7月7日に亡くなった永六輔氏の評伝。本格的。気になった部分を引用。

○…考えてみると、作家が番組で面白おかしく語り、時間配分などもそつがないのは、もともと頭の中に台本があるからではないだろうか。番組でハプニングが起きても、頭の中で臨機応変に書き直せばいい。前田武彦はタレントの関根勤との対談で、「書くということはしゃべることと無縁なようでいながら、じつは話のポイントを整理して、凝縮するトレーニングになると思う」と指摘してこう語っている。

…他人が読む読まないは別にして、書いていてちょっと長いと思えば、どこを落とすかとか、これじゃ自分が面白いと思ったことが伝わらないと思えば、じゃどうしようと考える余裕があるでしょ。書いたものなら。だから以前、僕のところに弟子志望のヤツがきて、しゃべりのタレントになりたいという。だから僕は、何か書けとிட்டんです。うまいしゃべりをやるには書かなきゃダメだよ。この男といま会うととても楽しくおしゃべりできる。僕は無理に書かせたらだと思ってるんです。ツボを押さえて楽しく話せる。(『前武・関根のおしゃべりに会いたくて』ゴマブックス・2001年・22～23ペ)

前田はこうした力を「話のデッサン力」と呼んだ。永や前田の話は面白おかしく、あっちこちに飛んでいるようでいて、きちんとオチをつけて終わるのに驚くことがしばしばだ。「話のデッサン力」を鍛えたからこそなのだろう。

こう見てくると、放送作家から名パーソナリティ、名司会者が生まれたのは不思議でも何でもなく、むしろ当然という気がしてくる。(78ペ)

○…話芸にぶつかったら話術なんか、ぶっとんじゃう。僕はラジオではプロのつもりでも、話芸には手も足も出ないもの。背筋が寒くなって声も出ませんよ、声を出すと、その後が怖ろしくて。とに角、術を使っているようじゃ芸人にはなれません。(97ペ)

○…司会の小島正雄が話し出すと「前置きが長すぎる！」と大きな声。「スポンサーです。あの王様にはかないませんよ」。小島は王様のもとへ。番組を説明し、化粧品などをもらう。資生堂がスポンサーなのだ。

場面変わって、テレビ作りのコント。続いて、テレビに夢中な家族。泥棒にも気づか

ない。

ここまででテレビそのものの風刺とわかる。徳川夢声が出てきて「テレビ……これほど馬鹿げたものはない」。「娘も大嫌い、あんな電気紙芝居などは」とトニー谷が応じる。

後半は、人気番組のスポンサーになって世界制覇を企てる大泥棒が登場。「テレビのほかに強力な武器がある」とボタンを押し、核爆発を起こす。

小島が語りかける。「私どもは（恐竜）イグアノドンイグアノドンの卵を二つ持っております。一つは原子力、もう一つはテレビ」

まるで、50年後の現在を見通していたかのようだ。日本テレビの初代社長の正力松太郎は、アメリカから日本に原子力とテレビを導入した。その局で、自らを風刺するような番組を放送していたとは一。ディレクターだった井原高忠（いはらたかただ）（84）はいまアメリカに住む。「芸術祭に出すんだから、まじめな顔した番組を作ろう。じゃあ、テレビと原子力だって、すぐに決まりましたよ」

社内の抵抗はなかった、という。「ぼくの企画で通らなかったものはなかったからねえ」（110 ペ）

○…僕は三十分の番組は三十分で撮る、または録音するということが当然と考えてきた。つまり生放送と同じ緊張感があるべきだということである。録音でも、録画でも決められた時間内に収めることができ初めてプロなのだ。（123 ペ）（柳沢注：授業論の基本に据えるべき至言だと思う）

○…その下地や礎石となったのは、白桃世代（昭和 8/9/10 年生まれ）が生まれたころから味わった価値観や体験である。それはほとんどすべての白桃世代に共通した価値観となり、彼らの意識や行動の中に蓄積され、人生の年輪を肥やす大地となった。

もっと端的に言えば、白桃世代の原点は、幼児期から少年期に遭遇した「戦争体験」である。戦陣訓や教育勅語から始まり、学校や目上の人から教え込まれた教え、訓示、軍事一色の世相、疎開先での苦勞・葛藤、飢餓意識、物不足、避難生活、外地からの引き揚げ、両親や家族との死別など、戦時中での体験から、戦後大きく変わった大人の意識や発言、教育指導に戸惑いながら戦争体験を胸に二度と戦争を起こすまいと決意し、白桃世代に共通の価値観が支えとなって戦後の復興、再生に取り組んでいった歴史がある。（大久保元春『輝ける昭和のフロントランナー 白桃世代』文芸社・2015 年）

「白桃世代」には、もちろん昭和八年生まれの永六輔も入る。先にあげた昭和十年以外を私が調べたら、ざっとこんな顔ぶれだ。（順不同、早生まれを含む）。

昭和八年生まれ＝今上天皇，黒柳徹子，藤本義一，伊丹十三，天野祐吉，森村誠一，浅利慶太，吉田喜重，平幹二郎，ペギー葉山，菅原文太，草笛光子，若尾文子，渡辺淳一，藤田まこと，財津一郎，山谷初男，藤子・F・不二雄，針すなお

昭和九年生まれ＝皇后美智子，大橋巨泉，愛川欽也，井上ひさし，山田太一，山崎正和，藤村有弘，牧伸二，池田満寿夫，筒井康隆，中村メイコ，財津一郎（ママ），宇野鴻一郎，佐江衆一，灰谷健次郎，小中陽太郎，石原裕次郎，坂上二郎，藤子不二雄 A，横山光輝

黒柳徹子，大橋巨泉，愛川欽也，井上ひさしら，永と親しかった人も多いことが分かる。矢崎泰久や，永が作詞した曲を歌った「デューク・エイセス」の谷道夫らも，同世代だ。（191 ペ）（柳沢注：昭和八年生まれに故・柳沢恒雄を加えてメモする。）

○…いじめ自体は悪いことではないんです。（略）強い相手をいじめることはいいことなんです。（略）では悪いのはなにか。それは「いじめ」ではなく「弱い者いじめ」なんです。（略）上級生が下級生をいじめる。健常者が障害者をいじめる。ある民族が違う民族をいじめる。いろいろあります。（略）弱い者いじめは絶対にしてはいけない。（215 ペ）

○…英語で“journeyman”と言えば，「職人」のことだ。永は，職人たちと深くつき合い，その身になってラジオや講演などで自ら語ることによって尺貫法を復権させる運動をしたような「言葉の職人」でもあった。

世間師の中で，永のイメージに近いのは「旅芸人」だろう。永は，旅先でテレビ番組『遠くへ行きたい』などの収録や取材などをするほか，現地のお寺や野外で「しゃべり芸」を披露し，自分で作詞した曲を歌うこともあった。メディア時代の旅芸人らしいのは，地方で顔なじみのパーソナリティがやっているラジオ番組のスタジオを訪ね，その折々に語りたこと，語るべきことを電波に乗せて伝えたことだ。

歌手の小室等は，学生時代から永のファンだった。「永六輔さんの詞は非常にシンプルで，それまでの歌謡曲の歌詞が類型的な起承転結をきちっと持っていたのとは，まったく違っていた」「コピーライターの先駆者的な資質だったのでないでしょうかね」「時代が求めるものの本質を見事につかんでいた」と著書で褒めている（『人生を肯定するもの，それが音楽』岩波新書・2004年）。（227 ペ）

○…坂巻によれば，『大往生』というタイトルを発案したのも永だった。当初は坂巻が考えた「志について語ろう」という仮題で企画が進んでいた。ゲラができ，二ヵ月後に刊行という段階で，永が言い出した。「死とか病とかは暗い印象になるけど，日本人が唯一あこがれる言葉は『大往生』。タイトルが漢字三字の本は他にないから，本屋でも目立つと思う」と言うのだった。「有名人の最期の列伝みたいにまとめた本と誤解されないかなあ，などと私には疑問があったのですが，永さんが『絶対にこれがいい』と。あとで思えば『大往生』じゃなかったら，あんなに売れなかったでしょうね。永さんのすごいセンスに驚かされました」と坂巻は語る。

当事者以外の『大往生』評もたくさんある。一つだけあげておこう。宗教学者の山折

哲雄が新聞に寄せた「川柳的発想で息苦しさ解消」という文章から。

…『大往生』が当たった秘密は、まずこの川柳的発想にあると思う。老いや病や死のようなうっとうしい問題を、意地悪く笑いとばしたり柔らかく皮肉ったりしている。深刻ぶらない軽口の人生観察がつぎからつぎへと登場してくる。一行詩のような、一口小話のような按配で……。それらを編集し、超短編小説のようなストーリーに仕立て上げていくところに、永さんの工夫があったのだろう。(朝日新聞 1994年9月21日、夕刊)
…(中略)…永の持ち味は、余裕を持って短い言葉で鋭く本質を突き、そこに笑いや風刺を忘れない姿勢だった。その集大成が『大往生』だったと言っていい。(234 ペ)

○…私自身、新聞記者の定年が近づくにつれて若い人たちを対象にした「ジャーナリスト教育」の大切さを痛感し、大学の非常勤講師としてなるべく多くの機会をつくり、学生たちと対話するように努めてきた。そして、教室でジャーナリストとしての基本的な素養を語りながら、「なんだ、どれも永さんがやったことじゃないか」と感じるようになった。ここでも六輔にちなんで、六つに絞って箇条書きにしてみよう。

①労を惜まず、現場に足を運ぼう。

取材の基本が、現場主義なのは間違いない。週の六日を旅先ですごした永は、ほとんどいつも取材の現場にいたことになる。「現場に行ったら、高いところに登れって。宮本常一さんの教えを実践しています」と私に言った。現場を俯瞰することで全体像が見えてくるというのは、新聞社で新人記者が教わることと全く同じである。

②「記者」の前に、優れた「聞屋」になろう。

これは私の言葉遊びだが、もちろん「聞屋」は「新聞屋」の略で、時に蔑称ともなる。しかし、それを「聞くことを専門にするプロフェッショナル」と解したらどうか。「記者」は、取材したことを書く。取材とは、資料に当たるとか、現場を歩くとかいう行為も大事だが、何より取材相手の声に耳を傾けなくてはならない。有名人から無名人の言葉まで、広く耳を傾けて『大往生』などに結実させた永は優れた「聞屋」だった。

③伝えるための技術を磨こう。

伝わらなければ、発信しないのと同じである。「むずかしいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを面白く」。井上ひさしの言葉を座右の銘にした永は、伝えることに気を遣う人だった。しかも、ラジオ、テレビ、雑誌、新聞など、媒体を使い分けて伝えることも巧みだった。ラジオの『土曜ワイド』を放送する朝の毎日新聞にコラムを書き続けたのは、媒体の持ち味を組み合わせるメディア・ミックスの試みだった。

④「一社ジャーナリズム」でなく「一者ジャーナリズム」を。

日本のジャーナリズムで良くない傾向だと私が常々思うのは、「○○新聞の記者」などと記者個人より会社が先に来ることである。そこから「会社の意向」を忖度するような

人も出てくる。第3章で今野勉が指摘したように、永は「個」の人だった。TBS ラジオを中心に仕事をしたように見えるが、それは TBS への忠誠心からではなく、一緒に番組を作る「仲間」や「同志」がそこにおいて「居心地がいい」からだった。

⑤「人間力」を鍛えよう。

これも本来の使い方ではないが、「人間力」を「人間としての力」だけではなく、「人のあいだをつなぐ力」といった意味でも私は使っている。「個」で仕事する「一者ジャーナリズム」が土台とはいえ、「個」と「個」をつなぐチーム力がないと、情報を受け取る「個」との信頼感や連帯感は生まれないと考えるからだ。そもそも人は人の間でしか生きられない。その間をつなぐものをメディア（媒介者）と呼ぶなら、メディアの仕事は取材先と読者、聴取者、視聴者を媒介するだけではなく、広く人と人をつなぐことだろう。永は「個」の人でありながら、「個」のつながりの中でしか仕事をせず、分散している人と人をつなぐことにもたけていた。

⑥メディア・リテラシーの力を高めよう。

メディアを批判的に読み解く力を意味する「メディア・リテラシー」こそが、いま最も大切な力である。ウソを見抜き、確かなものを見抜く力を身につけないと、「フェイクニュース」にだまされかねない。ついリツイートをしてウソの拡散に加担しかねない。

(245 ペ)

○…著書一覧を見て、永が本を書き始めた初期に芸能関係が多いと気づかれたことだろう。③『わらいえで 芸能100年史』（朝日新聞社・1965年）や⑤『芸人たちの芸能史 河原乞食から人間国宝まで』（番町書房・1969年→文春文庫）は、日本芸能史の名著だと私は思う。自分が生まれる前の先達が伝えてくれた芸能をいかに現代らしく工夫し、次の世代に渡すか。それが永の終生のテーマだった。「時代を旅した言葉の職人」と言うしかない。(270 ペ)

○…さて最後に、よく聞かれる質問に答えて読書案内を閉じることにしよう。「永さんの本で、一番好きなのは?」。難しい質問だが、あえて一冊に絞るなら、『悪党諸君』をあげたい。日本各地の刑務所を訪ね、受刑者たちに話しをした講演の記録。犯罪者でありながら自らも傷ついているような人たちに向かって巧みに慰め、熱く励まし、面白おかしく語る。「言葉の職人」の至芸と言えるし、読んでいくうちに深い教訓が残る。親鸞の悪人正機説を持ち出すまでもなく、この「悪人」たちは救われるだろうと思うことで、こちらも救われる気持ちになる得がたい講演録である。私は旅先などで時間があくとタブレット端末を開き、この本を読むのだが、笑っていたかと思うと、つい涙が出てくる。同じ経験をしている人が少なくないかもしれない。(272 ペ)

*

この本を読んで永六輔氏のことますます好きになった。さっそく、amazonで著書を三冊ほど注文した。『職人』(岩波新書),『大往生』(同上),『悪党諸君』(青林工藝舎)。いずれ、これらの本でメモを書くことになるだろう。

◎出口治明著『本物の思考力』(小学館新書・2017年)

タイトルが凄い。これを読んで、本物の思考力が身につかなかつたら意味がない。書く方も読む方も真剣勝負である。成果は?…これまでのところ、十分にあったと思う。気になった部分を引用して記憶に留める足がかりとしたい。

○…じつは、開国・富国・強兵というグランドデザインを最初に唱えたのは、薩長の志士たちではなく、阿部正弘や井伊直弼といった江戸末期の幕閣たちでした。彼らは「徳川幕府が一貫して探り続けてきた鎖国政策のせいで、日本は欧米列強から後れをとり、国力が低下してしまったのだ」と見抜いていたのです。アヘン戦争の結末が彼らを覚醒させました。清(中国)のように半ば外国の植民地にされたり、資源を搾取されたりしないためにも、早く開国をして、富国強兵を推進しなければならない。このような考え方は、もともと幕府のなかで提唱されたものでした。

これにたいして薩長が唱えていたのは尊皇攘夷です。ここでいう尊皇とは要するに「幕府より天皇を尊重して、日本古来から続いてきた天皇中心の国家体制にしよう(つまり徳川幕府を倒そう)」ということ。攘夷とは「外国人を力で排除してしまおう」という意味です。つまり「鎖国をもっと強化して、外国人を入れないようにしよう」ということでした。じつは、薩長より幕府の考え方の方がはるかに先進的だったのですね。…(中略)…

…それでも表向きは「尊皇攘夷!」と叫び続けるのですが、内心では「攘夷は無理だ」と気づきました。そこで薩長は上手に攘夷の旗を降ろして、尊皇を残したまま、幕府の開国・富国・強兵路線をシレッと採り入れてしまったのです。ここに明治維新の幸運がありました。完全なる宗旨替えながら、「尊皇ですよ。理念は変わっていませんよ」と誤魔化したのです。

そして、大久保利通という優秀なグランドデザイナーが、京都の御所で静かに暮らしてきた天皇を担ぎ出し、「開国だ!富国強兵だ!」という流れへと巧みに誘導しながら、明治維新を成し遂げてしまいました。(55ペ)

○…日本の大学、大学院を巡る実態を改善するには、経済界の上層部の人たちが、意識を変えることがいちばんの早道です。過去の成功体験に、いつまでもしがみついている

場合ではありません。

グローバルスタンダードに合わせればいいだけですから、話は簡単です。すなわち、大学院生を優遇すること。大学生を採用する場合は、何よりも成績を重視するという、至極真っ当なことを実践するだけの話です。

昨今のグローバルなビジネス環境においては、リーダーやトップランナーと呼ばれるような人々は、当たり前のように修士号、博士号を、しかも往々にしてダブルで保持しているのですから、そのスタンダードに合わせていかなければ、日本の経済は確実に後れていきます。採用年齢の足切りといった悪習はやめて、年齢フリーで、大学や大学院でしっかりと勉強して思考力を磨いた人材を積極的に採用していく。たとえば経団連などがそうした方針を打ち出せばいいのです。

前章で述べたように、長時間労働がなくなり、18時に職場を出ることが普通になれば、空いた時間でさまざまなことに取り組みます。たとえば、自分が毎日、飲み会に参加している一方で、同僚が大学院に行って修士号を取り、給与が1.5倍になったとしましょう。そうした例が自分のまわりに出てくれば、周囲の人間も確実に感化されていきます。勉強して成果をあげれば給与が上がるという、グローバルな世界ではごく当たり前の環境をつくり、身近にお手本となるようなロールモデルが出現すれば、日本のビジネスパーソンの意識は大きく変わると思うのです。(99 ペ)

○…要は、企業が TOFEL のスコア 100 以上を採用時の基準として明示してしまえばいいのです。経団連や経済同友会、全国銀行協会などの会長が一堂に会して、「TOFEL で 100 以上のスコアを持ってこなければ、一切採用試験に応じないと決めました。就職を希望されるみなさんは、英語をしっかりと勉強してください」と宣言すればいいのです。それだけで、学生は必死に英語を学ぶようになるでしょう。英語が使えないと、就活でまったく相手にしてもらえない—これは大きなインセンティブになります。

英語は、きちんと集中して勉強を続ければ、1年もするとかなり上達します。TOFEL すこあ 100 も、けっして無謀な挑戦ではありません。学ばなければ、先がない——。そんな現実があれば、人は何ごとでも必死に取り組むようになるものです。(103 ペ)

○…“自称”海外通の人はよく「外国人と話すときは、政治と宗教の話題は御法度だ」などと言っています。しかし、それはまったくの誤解です。たとえば日本人の経営幹部同士で話すとき、どんな話題で盛り上がると思いますか？ トランプ現象やアベノミクス、選挙、消費税、中国や韓国、あるいは IS の話題……よくネタにされるのは、そんな話題ではないでしょうか。内々の雑談では、政治を批判したり、ときおり外国を揶揄し

たりすることもありますね。それは外国人もまったく同じです。彼らも、政治、経済、宗教といった話題が大好きです。僕は中国の経営幹部と、何度も共産党政権について語り合ったことがあります。

なぜ、“自称”海外通の人がそのような勘違いをするかという、相手（外国人）が彼ら（日本人）の知識不足を見抜いて、レベルを合わせてくれるからです。日本人の経営者に政治や宗教、歴史の話を振ってもあまり盛り上がりませんので、話題を変えて、ワインやゴルフの話で場を取り繕ってくれるだけのことです。

それにまったく気づかず、「海外で仕事をするなら、ワインのことくらい勉強しておいたほうがいいよ」などとアドバイスしてくれたりするので、周囲の人も誤った認識がなかなか抜けない……というわけです。

相手が日本人であろうと、外国人であろうと、知識や教養が相手と見合わなければ（共通テキストがなければ）、なかなか会話は盛り上がりません。日本人どうしても、大学院で歴史や宗教学をしっかりと勉強した人と、大学で遊び呆け、何も勉強してこなかった人とは、話は合わないもの。それと同じです。（106 ペ）

○…僕は実際のところ、上の人間がいくら口やかましく言ったところで、部下が思い通りに育つとは考えていません。中学校のとき、陸上をやっていた、そう痛感しました。100メートル走は努力ではなく、持って生まれた才能がモノを言う世界だったのです。

下の人間が育つかどうかは、結局のところ当人の器の問題です。人間が成長するというのは、当の本人に資質や適性がある、あとはそれを開花させることができたか、できなかったか——。そういうことだと考えています。もちろん、本人の頑張りは絶対に必要です。しかし、周囲がどんなに厳しく鍛えたところで、成長するかどうかは資質や適性次第。ありていにいえば、人が育った、というのは本人に伸びるポテンシャルがあったから、伸びただけなのです。

人にはそれぞれ、異なった資質や適性があります。組織ができることといえば、大きく育つポテンシャルのある人材を採用し、さまざまな部署をローテーションさせながら適性を見極めて、順調に育つかどうかを見守ることくらいでしょう。…（中略）…

上の人間がやるべきことは、冷静な適性や資質の見極めです。管理者が必要なのであれば、社員のなかから管理者の適性があると思われる人材を見つけだし、それから管理者教育を施せばよいのです。正直に言うなら、人材は育てるものではなく、見つけだすものだと思います。（129 ペ）

○教育の目的を考えたことはありますか？ 学校教育でいちばん大事なものは、生徒たち

が自分の頭で考えたことを、自分の言葉で、自分の意見として臆することなく発表できる力を子どもたちに与えることです。…（中略）…すべての基本になっているのは、自分の頭で考え、それを自分の言葉で相手に伝える力です。そして、考える力は、勉強することでしか磨かれないというのは、すでにお話ししたとおりです。

自分で努力する姿勢も大切ですが、学校教育のレベルを上げ、社会全体の仕組みのなかで子どもたちを鍛える環境をつくり出すこともまた重要です。では、教育のレベルを上げるにはどうすればいいのでしょうか。まず着手すべきは、企業の採用基準を根底から見直し、大学時代の優の数を基準に採用を行うことです。たとえば、優・良・可・不可の4段階評価で、全科目の3分の2以上で「優」を獲得していない学生は、採用しないという基準を経団連や全国銀行協会などが打ち出せば、大学生は必死で勉強するようになります。前述した TOEFL100 以上を採用基準にする、という議論と同じように、企業団体が大号令をかければ、直ちに変化が起きるはずです。

ひとたび入学してしまえば、あとは4年間遊んでいても卒業できるのが日本の大学です。学生は遊びやアルバイトに夢中で、授業を熱心に聞くこともありません。それでは教師のモチベーションも上がらないので、レベルの高い授業が展開されることにはならないのです。しかし「優」を取らなければ希望する企業に入れない状況になれば、学生は熱心に授業に参加するようになります。気の抜けたような授業をしている教師には、学生から苦情がくるでしょうから、授業内容のレベルも上がるはず

このように、企業が採用時に大学の成績を重視するようになれば、大学の教育レベルも自動的に上がります。大学の教育レベルが上がれば、それに合わせて高校の教育レベルも上がり、高校の教育レベルが上がれば、中学校、小学校の教育レベルも上がります。要するに、最後の出口を変えてしまえば、全体が変わるということです。

「それほど単純にコトが進むわけではないだろう」という向きもあるかもしれませんが、初等教育、中等教育、高等教育はすべて連動していますから、中長期的に見れば、採用基準を成績重視に改めるだけで、日本の教育レベル全体が底上げされていくと、僕は考えています。（132 ペ）

○…「本物の思考力」を鍛えるためには、「腹に落ちる」まで考え抜くことが前提条件となります。

僕が尊敬している、中央大学名誉教授の故・木田元先生（哲学者）も次のような趣旨の言葉を残しておられます。

「思考力を高めるためには、きちんと書かれたテキストを一言一句丁寧に読み込んでいくことが大切。句読点ひとつにも意味がある。そうして、著者の思考のプロセスを追体

験することによってしか、考える力は鍛えることができない」

そのとおりだと、僕も思います。本の読み方について尋ねられたときに、いい本であれば、僕が徹底した精読―速読、飛ばし読み、斜め読みをせず、本の最初から順番に、一言一句、しっかりと目を通していくこと―をすすめているのも、まったく同じ理由からです。

木田元先生は亡くなるまで、ハイデガーの原書講読を若い教え子たちとともに続けておられました。いくつになっても自分の考える力を鍛え続け、そのために必要な姿勢（方法論）を後進に伝えていった木田先生の取り組みは、本当に素晴らしいと思います。

さて、優れた思考力を得るということは、優れた他人の知識や思索、思考のプロセスなどを吸収したうえで、目の前の課題を自分の頭を使って考え抜き、自分の言葉で、自分の意見として他人に伝えられるということです。「自分の頭を使って、自分の言葉で考え抜く」ことができ初めて「腹に落ちる」という感覚が得られるのです。

また、僕が誰かの意見を見聞きして「腹に落ちる」ときは、その人の意見が相互に検証可能な数字・ファクト・ロジックに裏付けされていて、反論のしようがないときです。その3つが揃って、初めて議論に足る主義主張が完成します。

木田先生の言われる「きちんと書かれたテキスト」とは、数字・ファクト・ロジックがきちんと盛り込まれた、整合性がとれていて破綻のない文章のことだと僕は考えています。

たとえば、経済学について理解を深めたい学生に対して、僕はケインズよりもアダム・スミスの著作を読むことをすすめています。なぜなら、後者の方が文章がわかりやすく、数字・ファクト・ロジックをベースにスミスがどういう道筋でものを考え、「市場経済」というコンセプトを考え出したのが、丁寧に書かれているからです。スミスの書いた『国富論』を丁寧に読み込んで、その結論に至った思考の流れを追っていく、そうすることで、スミスの思考のプロセスや考え方が腑に落ちる、スミスの優れた論考を土台にして、自分の意見や考えをまとめる参考とすれば、自分の頭で考え抜くことができるようになり、自分の言葉で自分の意見を発信できるようになると思うのです。ちなみに、スミスのもうひとつの著作、『道徳感情論』も傑作です。

手間のかかる作業ですが、これを正しく実践しなければ考える力は身につけませんし、聞くに値する論考を述べることもできません。

いまはスミスを例に引きましたが、もちろんこの方法は経済学以外の分野でも非常に効果があります。要は優れたプロの頭脳に教えを請うという話しですから、デカルトであってもアリストテレスであっても問題はありません。

何か極めたい分野がある人はまず、そのジャンルにおいて長らく読み継がれてる古典

を、腹落ちするまで読み込むといいでしょう。（柳沢注：ここが本書のヘソだと思った）

○…複雑な問題を解決するときや重要な決断をするときほど、物事を丁寧に分析して要点を絞り、シンプルに本質をとらえなければいけません。人間の脳はとかくいろいろなことを考えすぎてしまう性質がありますから、イエス・ノーゲームを使ってシンプルに考えることが大切です。もちろんその際には、数字・ファクト・ロジックに基づいて事象を正確に捉えないと、間違った判断をしてしまう可能性があります。

たとえば、甲子園の常連校に通うA君という高校球児がいたとしましょう。

彼は幼いころから甲子園に出場することが夢で、高校では誰よりも真面目に部活動に取り組んできました。ところがある日、別の高校から転校してきたB君が野球部に入部してきます。B君はアルバイトやデートのために部活動をサボることもありましたが、野球のセンスは人一倍優れていたもので、入部まもなくレギュラーとなり、し合いで活躍します。それを見たA君は、「真面目に努力してもバカバカしいだけだ」と考えて、次第に練習をサボるようになりました。そして最終的には、A君は万年補欠のまま高校生活を終えたのでした。

これはあくまで僕が考えたフィクションですが、A君は非常にもったいないことをしたと思います。なぜなら「A君の甲子園に出場する夢」と「B君がA君より野球のセンスに優れていたこと」とはまったく別の問題だからです。別の表現をするなら、土俵が違うということです。

人間はみな、顔の造作も、身体のサイズも、持っている資質も違います。ですから人間の能力に差があるのは当たり前のことです。しかし、能力の差があるからといって、長年目標にしてきた甲子園の夢を捨てるのはいただけません。なぜなら、別にB君より野球のセンスがなかったとしても、そのまま練習を続けていけばA君もレギュラーになっていたかもしれないのです。A君とB君がチームで活躍し合うことで、甲子園でより上に勝ち上がっていったかもしれません。もちろん、すべては可能性の話でしかありませんが、諦めてしまえば、その時点で夢が叶う可能性はゼロになります。A君が「真面目に練習をするなんてバカバカしい」と判断したのは、大失敗だったのではないのでしょうか。

ここでは理解がしやすいように、僕の考えたシナリオを使って説明しましたが、実際の社会でもA君のように、課題に対して「土俵の整理」ができないがために、判断を誤るケースが数多く見られます。

仕事でも同じです。所属する営業部に自分よりも遙かに才能があつて、成績が常にトップの同期の社員がいたとします。そこで、あなたが選べる道はふたつ。シンプルに考

えれば、選択肢は「彼に勝てないと諦めて自分はほどほどに仕事をする」か、「彼を少しでも真似して、自分も営業成績を上げられるように努力する」かのどちらかでしょう。そして、ロジカルに考えたら、会社員にとってのミッションは「いい結果を残すこと」ですから、当然選ぶべき選択は後者です。しかし、現実には前者のような選択をしてしまい、そのままクサってしまってやる気を失う人が少なくありません。感情に流されて、間違った選択をしないためにも、「土俵の整理」は非常に重要なのです。(154 ペ)

○…僕は基本的に、「その人がおもしろいかどうか」で付き合う相手を選んでいきます。考え方がユニークで、興味を惹かれる人であれば、積極的に付き合っ親交を深めていけばいいし、取り立てて惹かれるところのない人であれば、ご近所付き合い程度で十分でしょう。人と会う時間も、お互いが楽しくなければ時間の無駄ですから。

ビジネスパーソンであれば、自分の勤める職場のなかで、「この人はおもしろい」と思える上司や先輩がいたら、ぜひ仕事だけではなくプライベートの時間まで付き合ってみることをおすすめします。

僕の場合、たとえば前職の上司だった森口昌司さんがそうでした。初めてお会いしたのは、僕が社会人4～5年目。20代後半のころです。僕よりも10歳年長の森口さんは、麻雀では負け知らず、ゴルフはシングルプレイヤー、囲碁は7段という、目を見張るようなカッコいい人でした。

職場には遅い時間に出勤してきて、さっさと仕事を片付けたらすぐ麻雀に行ってしまう。職場にいる時間がものすごく短いのです。では、職場にいるときはバリバリ働いているかという、そうでもない。緊急の案件があっても、部下を呼んで、「この案件はこういう方針で臨むから、こういうアウトプットが欲しい」と的確な指示を出し、あとは居眠りしたりしている。そして、仕事が終わる時間になると、僕たちの作ったアウトプットをサッと確認し、「おお、ええ感じで片付いたやないか、おつかれさん。それじゃあメシを奢ってやろう。でも、どうせメシを食うならレストランでも雀荘でも同じやな。打ちながらでも食えるやろ」と、今度は僕たちを雀荘に連れていくのです。

こう話すと、「とんでもない上司」のように思う人がいるかもしれませんが、僕は森口さんの下において、本当に働きやすかった。というのも、彼は部下一人ひとりの能力をよく把握していて、上手に仕事を差配するのです。そして、何よりも無駄を嫌いました。

当時は、いまよりも「オフィスに遅くまで残っている人間が偉い」とか「オフィスにいるあいだは常に真面目に振る舞わなければならない」といった風潮が強い時代でした。だからこそ、森口さんのような型破りな存在と出会ったことは、僕の人生のなかで大きな衝撃でした。職場には森口さんを批判する人もいましたが、結果を残しているので誰

も文句を言えません。最後は専務取締役まで務められました。

森口さんの生き方を見て、「人間は遊ぶことに幸せを感じる生き物である。だから、幸せに生きたければ、仕事を効率良くこなさなければならない。そのためには、集中力を上げて取りかからないといけない」ということを学びました。この考え方はいまでも変わりません。

森口さんのように身近な存在から、自分が真似したくなるようなロールモデルを見つけると、実地体験を通じていろいろなことが学べます。

ちなみに、森口さんは現在、引退されて大阪で悠々自適の生活を送っておられます。いまでも僕のことをかわいがってくださって、大阪に行くと、「おい出口、飲みに行こう。かわいいオネーサンがいる店を見つけたんや」などと誘ってくれます。まったく枯れていません。最初に出会ったころと比べて僕も森口さんもかなり歳をとってしまいましたが（すでに 80 近いお歳です）、この関係は生涯変わらないと思います。（164 ペ）

○歴史上、仕組みづくりがうまくいった例としては、大英帝国（連合王国）をあげないわけにはいきません。

大英帝国は、世界中に植民地をつくり、上手に、ある意味、狡猾に統治しました。インド支配に代表される「分割して、統治せよ」という考え方は、その最たるものでしょう。

分割統治とは、人種や宗教、社会階級、地域の違いなどに目を付け、一国の集団を分割し、それぞれが反目し合うように仕向けて、宗主国である自国への反発が起きないようにしてしまう仕組みです。身近なところで小競り合いが続けば、多くの人はその注目するもの。大局的な視点で物事を捉え、「社会構造を変革しよう」などと統治者に反旗を翻すような動きが生じにくくなります。

インドには、各地に伝統的な地方領主が存在していました。マハラジャなどです。大英帝国は彼らをうまく利用して長期間の統治を実現しました。インドの権力者の子弟を、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学といった自国の一流大学に受け入れて、教育を受けさせました。

一流の伝統校に集まるのは、連合王国でも良家の子弟が中心です。上流階級の出身者は教育水準も高く、総じてリテラシーが高いので、人種差別の感情をあらわにすることがありません。

そうした学生が集まる環境に、インドの上流階級の子どもたちが集まると、どう感じるでしょう。

「あれ、思っていたよりも、連合王国の人はいい人じゃないか」

「インドに来て、自分たちを支配しているのは二流の連中なんだ。だから酷いことをするけれど、本国にいる連中は、ちゃんと話がわかるし、とても優秀なんだな」

そのように思い始めるわけです。連合王国の学生も「そうか、君は王家の出身なのか」「君の父上はマハラジャだそうだな」と一目置き、分け隔てなく付き合います。内心では「インドから搾取しているおかげで、自分たちが世界で権勢を振るうことができている。インドのおかげで、いい暮らしができているのだ」ということを、ちゃんと理解もしている。だから、余計大事にするのです。

連合王国で一流の教育を受けたインドの上流階級の人々は「本国のエリートたちは、きちんとしている」と思うようになり、支配されるなら上手に支配されよう、という発想になります。相手もしたたかなら、こちらもしたたかに。そういう関係性を築くことができたからこそ、長期間の統治が可能だったともいえるでしょう。

人類の歴史を勉強していくと、「上手に仕組みをつくった社会が成長し、長く生き残っていくのだ」ということがよくわかります。翻って、仕組みづくりがうまくいかなかった社会は、衰退していくしかないのです。

税と社会保障の一体改革、少子高齢化対策、成長戦略—日本が変革を迫られている課題はたくさんあります。そこで効果的な仕組みづくりができるか否かに、日本の将来がかかっていると思います。(206 ペ)

○僕は読書に次いで旅が好きなので、これまで国内、海外を問わず、いろいろな場所を巡ってきました。自分の足で歩いた町の数でいえば 1200 くらいにはなるでしょう。旅先ではさまざまな発見がありますが、それ以外にも、いいアイデアが降りてきたり、新たな角度から物事が見えてきたりした経験が数多くあります。列車に乗って、車窓の風景をボーッと見ているときなどに、意外にいいアイデアが浮かんできたりするのです。

ここで念を押しておきたいのは、ただ遊んでいればいいというわけではないということです。人間の脳は、自覚されなくても、いつもフル回転で働いています。ボーッとしているときでも、じつはいろいろなことを考えているのです。一息入れたところでアイデアが浮かんできたりするのは、それまでのインプットや考え抜いたことの積み重ねが、再整理された結果、つまり、日ごろの積み重ねがなければ、何も浮かんではきません。人間の脳は、まったくのゼロから何かを生み出しているわけではなく、それまでの蓄積をもとに思考しているのです。

日々の勉強をサボっている人が旅行や散歩などでリフレッシュしたところで、「ああ、楽しかった」という、感想を抱く程度で終わってしまいます。先ず何よりも大事なものは、

日ごろからインプットを積み重ねておくことです。(233 ペ)

○…僕はいつも「いま、この瞬間がいちばん楽しい」と思って生きています。過去にあった楽しい出来事も、つらい出来事も、正直あまり興味はありません。長い人類の系譜や経験・知見の蓄積としての歴史にはおおいに関心がありますが、自分自身の過去はほとんど振り返ることがありません。なぜなら済んでしまったことは取り返せないからです。それよりも、いまを存分に楽しみ、未来に思いを馳せるほうが健康的です。

僕は2017年の4月に、69歳になります。このくらいの年齢になると、多少なりとも死を意識するようになるもの。もちろん、まだまだ元気に働けると考えていますし、100年後にライフネット生命を世界一の保険会社にするという目標に向かって突き進んでいこう、という意欲にも満ち溢れています。

とはいえ、人間はいつか必ず死を迎えます。それは何十年も先のこともかもしれないし、10秒後かもしれません。ならば、いまこの瞬間に死んでも悔いが残らないように、いまを楽しく、全力で生きていくほうがいい、と思っています。同じことをやるにしても、どうしたらもっと楽しくなるかというチャレンジに取り組むほうが、人生はより充実するものなのです。(234 ペ)

○…マイナスと思われがちな経験も、「経験した」ことに違いはありません。経験しなかった人よりも、確実に知識が増え、物事を判断するときの材料になるでしょう。失敗も成功も、すべての経験から人は学び、賢くなることができるのです。

ライフネット生命も、数々の失敗を繰り返しながらこれまでやってきました。そして、設立後10年経った現在、約140名の社員でトップライン（売上高）100億円にまで達しました。失敗のほうが多ければ、そして失敗から学ぶことができなければ、とっくに潰れてしまっていたことでしょう。

世の中には、簡単には挽回できないことが数多く存在しています。恋人に振られてしまった事実は、取り返しがつかないと考えるのが普通でしょう。しかし、過ぎてしまったことを悔やんでも、仕方がありません。

大切なのは、失敗から学び、それを滋養にすることです。「次は同じ失敗をしないようにしよう」と考えられるようになるだけでも、立派な成長です。そうした経験を積み重ねていくことで、「あ、これは失敗しそうだぞ」と事前に察知し、失敗を小さくするための工夫を講じることができるようになります。

つまりは、「失敗が上手になる」ということです。そこまでくれば、挽回できるかどうかなど、考える必要はなくなっていることでしょう。(244 ペ)

○…人生でも、仕事でも、ゴールに向かって一直線に進める人はほとんどいません。大半の人は、失敗や成功を繰り返しながら、ジグザグで進んでいくものなのです。

僕はどちらかと言えば、部下の失敗を個別に捉えて評価するようなことはしないタイプです。定性的、定量的に捉えて一たとえば、一年という期間で、こういうミッションを完了させて、ゴールに辿り着くことができればいい、という見方をします。

途中、失敗したり、成功したりしながら、一定の成績でゴールすれば問題なし。いわばマラソンのようなものです。途中で歩いてもいいし、コースを間違えても引き返してまた走り始めればいい。その結果、51対49で勝利できれば御の字です。

51対49で構わないというのは、そのくらいの価値観で生きていくほうがハッピーだと考えるからです。常に「すべて勝つ」というような姿勢で生きていくと、つまらない嫉妬をされたり、妨害を受けたりするリスクも多くなります。人間はみんなチョコチョコなので、トータルで勝ち越すことを目標に、一步一步成長していけば十分でしょう。

とはいえ、「だから大人しく生きていけ」と言いたいわけではありません。目立った能力がある人は、どんどん目立っていけばいい。圧倒的な能力を披露して、嫉妬や妨害をはねのけてしまえばいいのです。出る杭は、簡単には打たれないような高さまで伸ばせばいいのです。…（中略）…

大事なものは、エースピッチャーがメインキャラクターで、バントが得意な控えはサブキャラクター—などということは、絶対にないということです。あえて言えば、全員がメインキャラクター。あるとすれば、メインかサブかの違いではなく、機能、すなわちファンクションの違いだけです。

人間の身体には、脳や手足、内臓などがあり、それぞれが大事な機能、役割を担っているのと同じです。脳だけがメインなわけではありません。もちろん、人間社会も同様でしょう。

大切なのは、その機能や役割のなかで努力を怠らず、輝いていけるかどうかなのです。それには思考力がものを言うことは、言うまでもありません。（247 ペ）

○「一緒にやりましょう！」と請われ、「やります」と返事をした以上は、責任を持って取り組まなければなりません。一度言葉にしてしまったことは、元には戻らないのです。

人生は、時間を巻き戻すことも、二者択一の両方を選ぶこともできません。それはこの世の中の単純な真理です。真理は覆りませんから、悩んでも、意味はないのです。そして、覆せない過去にとらわれているよりも、今晚、誰とお酒を飲もうか、夕食は何にしようか……そういった、ささやかな未来のことを考えるほうが、はるかに楽しく、有

意義で、おもしろいのです。

人間は誰でもいまがいちばん若いのです。明日になれば一日分歳をとります。やりたいことや、おもしろいことに、みなさんももっとチャレンジしましょう。

「環境が、あなたの行動にブレーキをかけるのではありません。あなたの行動にブレーキをかけるのは、ただ一つ、あなたの心だけなのです」（「未来食堂」代表・小林せかい／「日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー2017」の受賞スピーチより）最近、僕の心にいちばん響いた言葉です。（251 ペ）

◎山本紳一著『やればできるもんやなあー京大医学部に入ろうー』（ミヤオビパブリッシング・2017年）

PR誌「これから出る本」に載っていたので、篠ノ井高校図書館にリクエストして購入してもらった。薄くて読みやすい。自伝的内容を多く含み、興味深い一冊。

*

○著者・山本紳一氏（産婦人科医師）略歴（カバー裏掲載）

1949年 高知県宿毛市で生まれる。

1952年 父親（国家公務員）の転勤にともない、神戸市内に家族で転居。

1954年頃 父親が大阪府に採用されたのを機に大阪府岸和田市に転居。中学校までを岸和田市内で過ごす。

1961年頃 父親が家を購入。堺市に転居する。この家は店舗付きで、そこで母親が喫茶店を営み始める。

1965年 大阪府立三国丘高校入学。

1968年 大阪外語大学入学。大学在籍期間中は当時最長の9年間におよぶ。その間、実家の喫茶店で2年ほどマスターとして働く。その後、信州の旅館でアルバイトをしながらの生活を送る。信州では旅館での仕事ぶりを評価され、大学に籍を置いた状態で保険会社に入社。正社員として営業部に勤務する。

1977年 大阪外語大学卒業。京大受験と医師になる決意を固める。京都に居を構えて京大医学部受験のための生活に入る。この時28歳。

1981年 京大医学部受験生活3年。初志を貫徹して合格。31歳だった。

○専門分野 婦人科腫瘍 産婦人科手術全般。京都大学医学博士。

○…私の高校在学中の成績や席次は、全学530人中で500番台。しかも数学をはじめ、理数系科目は全くできないことで有名な生徒だったのですから、同級生たちも担任だった先生も、到底無理な志望だと思っておられたようでした。

大学の受験生としては年齢も取っていました。そこから一念発起していわゆる「ガリ勉生活」に突入し、合格したのは31歳の春でした。

後日、晴れて目標を達成したことの報告とお礼のご挨拶のため母校を訪問した時に、高校生当時、私のことをあまりよく思っていなかったはずの英語担当の先生が、「やればできるもんやなあ」と歎息していたのを、今でも憶えています。この「やればできるもんやなあ」がそのままこの本のテーマになればと深く念じて、この本のタイトルにも使っています。(21 ペ)

○…ある時、学内にいた自分に、先輩の美しい女子学生と意見を交わしたおりに、彼女に、「あなたは将来、もっと大きな人にならないといけません」と言われたことがありました。「もっと大きな人」が何を指しての表現なのかはいまだに不明ですが、当時はそんな気の利いたことを言う人もいたのです。…(中略)…しかし、「あなたは将来はもっと大きな人にならないといけません」と言われたあの言葉は、今となっては謎のままになっています。つまり医学部を卒業して、医者になってからも「自分の人生の本当の目的は完成していない」という気持ちをどこかで持ち続けさせられたままなのです。(25 ペ)

○…そうやって、2年の歳月が経過して、つまり2回続けて受験は不成功で、これではいつまで経っても合格しそうもないと思った時、ここは「我流を戒めよう」と「生まれて初めて」師につく決心を固めました。つまり予備校の門をくぐる決心をしたのです。

予備校は烏丸通の、京都御所の向かいにある京大受験の老舗予備校で、ここでみっちり自分の弱点を補強することになります。予備校の授業は1日5限で、同じ科目は同じ内容を一日5回教授します。そこで思い切って授業は自分の不得意な科目だけを集中して受講することに決め、結局、数学と化学の講義をそれぞれ5回ずつ、毎日受講することになりました。受講した内容はしっかりとノートに記録して、暗唱できるくらいに復習しました。

特に苦手の数学は毎日の課題を、「答は暗記せず」、家に帰ってから自分で改めて答案を作成する、という学習スタイルを確立しました。1日に同じ講義を5回聴く学習法は絶妙で、半年間通った予備校生活のうち、3カ月間で数学の苦手意識が消え去り、もうひとつの苦手科目の化学も問題なく消化していました。

数学では夜中に夢の中に問題が出てきて、その夢の中で解答にたどり着いて、ハッと目が覚めてノートに向かう、なんてこともしばしばでした。結局、京都大学の受験は各科目とも「教科書の範囲を一步も出ない」というのが、私が自分で苦勞して得た体験的結論です。

学習にあたっての教訓は、とにかく自分の「苦手な科目をなくす」というのが第一の方針でした。私の場合はまず数学をマスターしなければ、絶対に合格できないと分かっていたので、その数学を克服することを最優先として取り組んだのです。とにかく「繰り返し」しかない。与えられた課題を、「答えは絶対に参照せず」に自力で解答できるまでアタックを繰り返しました。(47 ペ)

○何度も申し上げたように、数学は私にとって最も苦手な科目でしたが、結局予備校の授業に従い、授業で選択された問題だけをひたすら解いていたということに尽きます。とにかく問題が自力で解けるようになるまでは解答を参照せず、徹底的に問題にかじりつきました。深夜、眠っている時の夢の中で問題が解けて、大変驚いたことは前述しました。人間の脳は一見、眠っているような時でも、目先の課題を決して忘れ去ってはいないのだなあ、と感心した次第です。…(中略)…

結局のところ、数学と化学は予備校の授業内容を一步も出ない学習で合格レベルに到達したことになり、予備校の授業がいかに素晴らしいものだったかを思い知らされる結果となったのです。(48 ペ)

○「英語は究極の暗記科目」です。暗記がモノを言う科目なのです。とにかく覚える事、英語の学習にはこれしかありません。テレビの放送で、中国の学校の英語の授業をたまたま放映しているのを見たことがあります。中国人の学生たちは、ただひたすら何度も繰り返し同じことを読み、書き、そして暗記しています。究極の語学習得法ですね。とにかく繰り返し読んで、書いて、発音する。そしてすべてを暗記する。…(中略)…私は今回、受験勉強を始めるにあたって、まず全科目分の高等学校の教科書を買いました。教科書にすべてがあり、教科書以上のことを問われることはないのですから、まず第一に教科書の内容を完全に理解することが先決です。

英語の学習で暗記と言われてもピンとこないかもしれませんが、英語学習の第一歩は「教科書の丸暗記」です。できれば3年分のリーダーをはじめから最後まで、すべて丸暗記するのです。初めは厳しいですよ。絶えず初心に帰って、自分が京大の医学部生になっているところを想像してみてください。最初はキツく思われていたリーダーも、慣れるに従って向こうからエールを送ってくれているように思われてくるから不思議です。

丸暗記なんて勉強じゃあないと思っているかもしれませんが、続けてみるとその偉大な力に感服しますよ。最初は1レッスン分の暗記でもう逃げだしたくなってしまっていますが、続けているうちにだんだんと要領が身についてきて、初めの頃の辛さはどこかへ消えてしまいます。考えてみれば、ただひたすら暗記に専念すればいいのですから、こ

んなに簡単なことはないはずです。ただ覚えればいいのです。これほど簡単な勉強はない。教科書には必要なすべての単語と、必要な文法の知識が網羅されています。

英語の学習では文法という面倒くさいオプションが付いて来ます。これは高校の英文法のテキストに必要な知識はすべて出ていますから、テキストとリーダーをしっかりと復習するだけで十分です。ただし、テキストの内容は一字一句に至るまで、すべてを丸暗記することが大切です。どんなに小さな事項も見落とししてはなりません。見落としを許すと、それがやがて受験の失敗の悔しい原因になってしまいます。(52 ペ)

○…面接は恐れるに足りません。そもそも面接官は初めから君たちの医学部入学の死亡を知っていて、その必要性を認めています。そして何よりも面接は基本的に君たちを合格させるためにやっています。面接で難癖をつけて落第させてやろうなんて、そんなケチな面接官はたぶん、京大にはいないと思います。

ふたつのことに気を付けてください。まずは君たちの医学部入学の動機です。どうしても入学してぜひとも医師になりたいという熱意をしっかりと面接官に伝えることと、もう一つは医学部で勉学を継続するのに十分な意思と体力があることを、面接官にわかるように伝えることです。面接や小論文についてはいろいろと小難しいことを書いた本が出ていますが、要は「やる気と体力」です。(57 ペ)

○…京都大学は伝統的に「探検大学」と呼ばれてきた歴史を持っています。つまり人間を含めた自然全体を学問の対象とするフィールドワークの伝統を誇りとしているのです。徹底的に現場に立脚した科学なのです。自分自身の足で現場を歩き、自分の目で直に対象を見て、自分の耳で聞いて、肌で感じたもの、そうした野外の経験を基盤とする学問をしてきました。(69 ペ)

○ノーベル賞学者大隅良典氏の受賞後会見の言葉。

「基礎研究をおそろかにしては科学の発展はなく、社会の基礎となるべき教育をないがしろにしては私たちの未来はない。短期的な利得にとらわれず、真理への憧れを育てる息の長い視野を持つこと…(中略)…日本の教育にダイナミズムを取り戻さねばならない。未知のものへの、自由への、真理の探究への憧れを取り戻さねばならない」(96 ペ)

＊

自伝的要素が強い内容であり、意味が深い。この本を求める人は、この本から良い読者になることを求められる。著者は平易な言葉を明快に用いて、合格を勝ち取る方法を

説く。しかし、ただそれだけではない。この本は読者に、良い人生を歩むことを求めている。そして、そこには読者の数と同じ数の正解があり、それらは、すべて異なるし、それで良いことを、さりげなく示してくれている。そこが素晴らしい。深いのである。

この本の内容をしっかりと受け止め、自分なりの充実した人生を歩むことができる読者になりたい。そしてその方法は、必ずしも著者と同じ京大医学部入学→卒業→医師、という道だけではないのであろう。

自分の人生が本当に充実しているかどうかということは、終わる瞬間まで誰にも分からないのではないだろうか。そうした、素敵なことを教えてもらった。深遠である。深淵である。深縁である。受験のハウトゥーを通して、人生のハウトゥーが学べる。ああ、きょうは本当に素晴らしい本が読めて幸せだった。

◎ローレンス・A・カニンガム著／長尾慎太郎監修『バフェットからの手紙（第4版）』（Pan Rolling 株式会社・2016年）（私物）

「まえがき」の前に掲げられた言葉がすばらしい。この文章以外の部分は今の私には理解不能。翻訳による文章のせいなのか、専門用語が多いせいなのか、理由はよくわからない。理解できた部分のみを引用しておく。

＊

「私の好きなのは単純で自然な演説であり、そんな話し言葉と同じようにまとめられている書物である—興味こそそられるような、そして力強く、簡潔でまとまったものである。激しくぞんざいなものではないほうがよいが、上品であったり整えられている必要もない」—ミシェル・ド・モンテーニュ（『随想録』1580年）

＊

「人の誠実さや本姓は言葉に現れる。書物はそれほど多くのことが書かれていないように見えても実際はそうではない。言葉に切り込んでみればそこからは血がにじみ出てくる。—言葉には血が通っており生きているのである」—ラルフ・ウォルド・エマーソン（『偉人論』・1850年）

＊

「味わって読むべき本や貪り読む本はあるが、じっくり噛みしめてすべてを消化すべき本はほんのわずかしかない」—フランシスコ・ベーコン（『ベーコン随筆集』・1597年）

＊

まえがきが良く分かって、それ以外の部分がほとんど分からないという本はキミが初めてだったよ。キミを明日、ブックオフに連れて行ってあげよう。素晴らしいことを教えてくれて、ありがとう。

◎^{あらお}新津新生著『蚕糸王国長野県—日本の近代化を支えた養蚕・蚕種・製糸—』（川辺書林・

2017年）（私物）

夏ごろに購入。しばらく「積ん読」状態だったもの。この本は通読する本ではなく、地方の歴史書と同様にざっと目を通した後、普段は本棚に飾っておき、折に触れて辞書的に使うべきタイプの本だと思った。あとがきに素晴らしい視点が書かれていたので抜き書きして紹介する。

○…近代日本史の中で長野県がどれほど素晴らしく、面白い場所であったか、日本の中で長野県（民）がどう存在したのかを確認することが、今後の地域社会を展望する上でも大事ではないだろうか。かつては山国の厳しい自然条件を逆手にとって蚕糸王国を築いたが、先行きが不透明な二一世紀においても、もう一度信州の山河を見直す時が来るのではないか。

しかし、現在、各地の里山は荒廢の極みにある。林地においては間伐が行き届かず、かつての薪炭林や採草地はほとんど利用されていない。そうした荒廢林野に再び桑の木などを植え、食品や化粧品原材料分野などで新たな需要を拡大していくことも二一世紀の課題となろう。

もうひとつの懸念材料は、現在、ナショナリズムが再び台頭し始め、地方分権や地方自治は軽んじられる傾向があることである。長野県の先人の気風に倣うならば、二一世紀の地方自治の風は長野県から発信してほしい。中世の二の舞になって、長野県が空中分解して県民がチリヂリバラバラにならないことを切に願う。若い県民にも「信州を残そう」という意識を持って欲しいのである。『信濃の国』という県歌が学校で半分強制的に歌われたのも、バラバラな信州を意識的にまとめようとしたからである。その点で「蚕糸王国」とは長野県を統合するキーワードなのである。（「おわりに」 262 ペ）

○全体の構成概要は次のとおり。

第1章 「蚕糸王国」はどのように生まれたか

第2章 統計に見る勃興期の蚕種・養蚕・製糸

第3章 厳しい自然を生かした信州の蚕糸

第4章 製糸最盛期の輝きと陰り

第5章 世界恐慌と蚕糸王国からの転換

これらの他に、データ量とドラマ性あふれるコラム 16 本を収める。

＊

これからも、機械があれば本棚から出てきてもらって、色々な事を教えてもらいたい

と思っている。「信州の歴史を知っておくことは」「将来を展望するため役に立つ」。

◎佐藤優著『知の操縦法』（2016年・平凡社）

気になった部分を抜き書きして紹介。

＊

高等教育とは、知識には様々な型があることを学び、自分ならではの思考の型を作りあげていくことです。だから最初は、自分が好きだと思った人について学び、その思想の型を身に付けることです。ヘーゲル、カント、マルクス、荻生徂徠、西田幾多郎……誰でも構いません。まず一人の思想の型を知り、その人の考え方ではどういうふうに物事を見ていくのかを知って、また別の人の思想の型を身に付けていく。これが正しい学知の学び方です。ひとつの見方が絶対的に正しいと固定的にとらえてしまうと、陰謀論や反知性主義になってしまいます。この社会は一元的ではなく、多元的な成り立ちをしています。知には様々な型があり、他者とのその差異を共有することで新しいものが生み出されていくのです。…（中略）…

本書では、知の枠組みについて知り、モノの考え方の土台を作って、実際にどう応用していくのかを伝えたいと思います。（17 ペ）

＊

…このように、編集は一般の人でもできるという考え方に立つ **Wikipedia** に対し、百科事典は、編集は専門家にしかできないという発想のもとに制作されています。そのジャンルについて体系的な知識のある人が編集委員となり、項目立てや、執筆者を誰にするかを吟味したうえで制作するため、信頼性が高い。その項目についての問題が俯瞰できるので、自分がすでに知っていることは何か、知らないことは何かという、知識の整理をすることもできます。索引を使えば、一見関係のない事項の間にも関連性を見ることができるので、知識を拡げることできます。…（中略）…

つまり、編集とは、知の土俵を設定する作業なんです。編集機能が入ると通説から極度に離れるものには留保がつく、もしくはハネられてしまうので、知的な世界での主流と傍流の見分けがつかず。

何かを学ぶときには、まず、型にはまった知を身に付けることです。最初から型破りなことをするのは、ただのでたらめでしかありません。基礎がないところには応用もないし、基礎をおさえていないと、間違った方向に進んでいってしまいます。問題意識先行型の学生は、着想が良くても、基礎的な学問手続きを踏んでいかないと、その後伸びていきません。最終的には、従来の研究になかった型破りな発想をしてほしいのですが、そのためには、やはり型を知らなければなりません。知には、かならず先行する学

説があります。学問的な用語は、すべて過去の蓄積の上に成り立っており、その蓄積を無視して独創的なことをやろうとしても、私的な言語、でたらめになってしまいます。ただ、先行思想をきちんとふまえて何かをやろうとすると、一生のほとんどを先行思想の研究に費やしてしまうので、どこまでを覚えておかなければいけないかという線引きをする必要があります。

その意味でも、百科事典のように、縦の歴史と横の歴史をおさえ、体系だった記述がなされるように編集されたものを読み、閉じている型を知ることは、型にはまった知を身に付けるという意味でとてもいいのです。何かを勉強しようと思ったときには、まず百科事典のその項目を読み、基礎知識をおさえたいうえで臨めば、勉強の効率化が図れますし、関連書の主張が本流なのか傍流なのかの見分けをすることができます。『広辞苑』（岩波書店）は、辞書として優れていますが、百科事典的な体系だった説明には弱い。昔の『現代用語の基礎知識』（自由国民社）は、一卷本百科事典の役割を果たしていたと思います。いまの『現代用語の基礎知識』は、「日本外交」の項目は私が書いているんですが、著者の独自見解でいい、という方針です。『文藝春秋オピニオン 20XX 年の論点 100』（文藝春秋）は、論点の選び方が恣意的で、そのジャンルの専門家でない人が執筆者に入っています。論壇において影響力がある人に、対立的見解を示してもらおうというやり方なので、百科事典的な視点はないわけです。（29 ペ）

＊

オウム真理教は魂が残っていれば復活が可能だととらえていましたが、裏返すと、穢れきった魂は復活できないということです。だから、オウム真理教という正しい教えを妨害しようとしている人たちは魂が穢れているので、死後に復活できなくなってしまう、万人復活という人類の大救済事業で復活できないのはかわいそうだから、まだ罪が軽くて魂がきれいなうちに殺してしまえば復活はできるという論理が出てきたのです。大量殺人はうらみつらみではできません。必ず、それを正当化するイデオロギーがあり、それは人類救済になることが多いのです。ちなみに、ルターもドイツ農民戦争の時に同じようなことをしています。農民は武器を手にはしているけれど、権力に対して反乱するのは最大の罪であり、できるだけ罪が少ない段階で殺せば、終わりの日に復活の可能性が残る。彼らを救済するためにすぐに鎮圧すべきだ、とルターは領主に進言し、実際に領主は聞き入れました。オウム真理教のポアは「狂気だ」と言われましたが、同じことをしたルターの思想も狂気だったのでしょうか。異常な現象に見えることでも、必ず先行する思想の中にその片鱗があるので、思想の体系は身に付けておいたほうがいいのです。

（47 ペ）

＊

弁証法的な考え方をしていくうえで一番問題になるのは、矛盾律が成り立つかどうかです。弁証法の考え方では、常に生成して変転していくから、「ある」が **being** ではなく、「なる」の意味を持つ **becoming** になります。A も B もつねに変わっていくところで、矛盾は成り立つのかどうかという問題です。

形式論理学では、矛盾を「A は B である」という肯定と、「A は B でない」という否定が同時に成り立つことを説明しますが、問題は「同時に」というところです。「A は B である」と言ってから「A は B でない」と言う間に、ほんの少しだけ時間の差が生まれています。頭の中であることを考えて、その次のことを考えるときにも、0.01 秒以下の世界かもしれないけれど、時間が経過しています。この場合にも「同じ」と言えるでしょうか。だいたい同じだから「同じ」とする考え方もあるけれど、0.011 秒と 0.02 秒の違いは？ 1 秒との違いは？ と考えていったときには、どうすればよいでしょうか。アウグスティヌスは、「時間とは、時間とは何かを問われないときは、わかっている。しかし、ひとたび時間を問われると、何のことかわからなくなる」と言っていますが、時間の経過や差異がどういう影響を及ぼすかということについて、我々は実はよくわかっていません。大した違いはないから矛盾は成立すると考えるのか、矛盾は時間や気温や空間の影響を受けない、現実にはない形而上学の世界でしか存在しないと考えるかどうかで、立場がわかれます。

たとえば実験も、同じ環境で実験を繰り返したといっても、気圧も違うし、時間も経過しているので、完全に同じ環境で再現するのは頭の中ですらできません。だから、STAP 細胞も、すべての実験を通じたとしても、「ない」という不在証明をするのは難しいのです。実在という言葉は、形而上界を含むのか含まないかで変わってきます。(181ぺ)

*

ちなみに、訳語として、矛盾はあまり適切とは言えません。どんな盾も突き破る矛とどんな矛にも突きぬかれない盾があって、その矛で盾を突くとどうなるかという中国の故事が語源ですが、実際に突いてみればいいのです。突き抜けなかったら、矛の主張が間違いで、突き抜くことができれば、盾の主張が間違っていることになります。ヘーゲルの考えでは、これは矛盾ではなく、「対立」です。対立は、一方が他方を圧倒することによって解決可能になります。

マルクスの例に即して考えてみましょう。資本主義システムでは、労働者を搾取しないと資本家は生き残っていくことができないので、労働者への賃金を払う以上に利益を追求します。資本の自己増殖が大前提なので、金儲けを否定できません。こういう構造を変えることを無政府主義者や社会主義者は考えました。搾取する者もいなければ、搾

取される者もない、すなわち人間が協働して働き合うシステムを作るのです。協同組合や宗教団体はそういったシステムで、人間と人間の関係を変えていけるので、そこにおいては資本主義的な階級関係は解消されています。ただ資本主義社会ではごく一部しか占めていないので、競争すると絶対に負けてしまいます。こういうように、物のあり方や関係を変えることによって問題を解決できるのが、矛盾です。ヘーゲルの考え方では、対立と矛盾を、弁証法で乗り越えていくことになります。

絶対に解消できないものは、「差異」です。身長の高さが違う、肌の色が違う、といったものは解消できないので、差異については、ヘーゲルは個人の趣味としてとらえます。

なにか相手と意見を異にした場合、自分には「対立」に見えているものが、相手には「矛盾」に見えているかもしれず、どのポイントでズレているのかを弁証法的に発展させて明らかにしていくことで、何らかの合意点が得られるかもしれません。援用することで、物事を解決していくヒントが得られます。(柳沢注：著者が外交官だった頃には北方領土交渉などで、この考え方を積極的に用いていたのだろう)

では、もし、相手との間に「差異」があったらどうすればよいのでしょうか。これは解決すべき事柄なのでしょう。これまで私が述べてきたことからわかるかもしれませんが、結論を言うと「差異」があるのは当然のことなのです。差異があるからこそ、多様性が生まれます。他者のと「差異」を許容できてこそ、真の知識人たることができるのです。(183 ぺ)

*

弁証法的な訓練をしていくうえで重要になるのが、敷衍というやり方です。物事をサマライズする要約の逆で、意味を広げていき、例などを挙げて説明することです。敷衍するには、かならず、どの部分が重要かを見極める要約の訓練が必要になります。要約と敷衍は本来セットですが、私たちは要約には慣れていても、敷衍にはなじみがありません。

この要約と敷衍が上手なのが、池上彰さんです。学術的な用語や難しい世界情勢を、一般に理解できる説明をするので、池上さんのテレビの視聴率は高いし、本も売れるのです。こういう技術を身に付けておけば、会社や学校であの人の話は面白い、わかりやすいと言われるようになります。どうやって身に付ければよいかというと、要約したのを見て、もとを復元していけばいいのです。たとえば、誰かの講演に行ったときに「サイクス・ピコ協定」という単語だけが出てきたときには、メモを取って、あとから自分で「1916年にイギリス、フランス、ロシアでオスマン帝国の専制的な支配を約した秘密協定」ということを加えていくのです。

弁証法は、自分の中で対話をしていくので、そこで要約することもあれば敷衍してい

くこともあります。変幻自在に物事を動かし、生成していくので、自分と相容れない意見の人が相手でも、途中で反論したりはせずに、どういう理屈なのかをとらえて、わからないところがあったときは、話者に質問をするのです。相手が何を言っているかを理解するための質問だから、「ここがわかりづらいのですが、こういう意味でしょうか」「具体例は～でしょうか」というように、迎合的な質問をするのです。

あえて、「迎合的」という言葉を使いましたが、マックス・ウェーヴァーは『職業としての学問』のなかで、大学は知を伝達する場所であるから、学生たちは自分の意見を言うのではなく、迎合的な質問をするべきだと言っています。サンデル教授の白熱教室型は、基本的な知識の共有がなされている相手ならいいですが、哲学的訓練や思想的訓練を受けていない学生が相手の場合は意味がありません。金沢大学の仲正昌樹さんは、ドイツのフランクフルト学派やハンナ・アーレントについての基本講義を本にまとめていますが、学生は迎合的な質問しかしていません。まず、仲正さんの解釈にもとづいて、フッサールやアーレントを理解する。その後、フッサールやアーレントの考えていることは違うのではないかということ指摘して、別の見方を提示して、意見を聞いていくのです。イギリスの哲学者カール・ポパーは、これを反証主義的な手続きと言いました。反証して、それに対して再反論して、というように批判的な論点をふまえたうえで、自分なりにこの問題についての結論を出すのが、正反合の「合」のプロセスなのです。しかしその合のプロセスも過程のなかにあるので、また新しい疑念が生まれてきます。これが、『精神現象学』の弁証法です。別の言い方で考えてみると、これはカントの二律背反—「こうあらねばならない」という絶対的な理念があつて、それは到達しようと思っても永遠に届かない、しかしそれを目指して努力していくことで現実との緊張は常にあるという構成と近いのかもしれませんが、終わることなき弁証法というのが、『精神現象学』にはあります。そこを、読者のみなさんには、いちばんつかんでいただきたいと思います。(186 ぺ)

*

キリスト教の歴史観は、終わりが前提になっているので、時間概念の刷り込みが日本人とは違います。終わりとは、イエス・キリストが復活し、最後の審判が行われることで、そこで救済がなされます。終わりとは目的であり完成でもあるので、スタートよりも重要になります。これは直線の歴史観なので、輪廻転生の縁の歴史観が刷り込みにある日本人は皮膚感覚として理解できません。

キリスト教型の歴史観では、目標である将来の到達点から現在の物事を見るので、目標に到達するにはどういうことを行えばよいのかという発想がしやすくなります。受験勉強や仕事で一定の成功をおさめていくには、キリスト教型の目的論構成でやる方が効

果が上がります。ポストモダン意向は目的論を廃していく見方が流行ですが、こちらは日本人の地の考え方に近いのでなじみやすいでしょう。(195 ペ) (柳沢注：たしかにこれは分かりやすい考え方だが、こんなに単純で良いのだろうか)

*

この本は佐藤優氏の書いた理屈っぽい本の中では分かりやすい方に入ると思われた。それもそのはずで、この本は連続講座の文字起こしをもとにして作られた本だからである。ただ、この種の本の欠点として、話が拡散しやすく、文章にやや緊張感が欠けている部分があることがあげられる。ただ、こうした特徴に留意して読み、本書から著者の良い部分だけを吸収すればいいのだろう。とても刺激的で面白い本。

◎ビートたけし著『バカ論』(新潮新書・2017年)(私物)

語り下ろしでとにかく読みやすい。たとえば、上田から新幹線に乗って東京に着くまでに読了できるくらいの分量・文章の密度。気になった三か所を引用して記しておく。

*

○…芸を盗むのは大事なことだと言える。

それも「こいつは上手いな」という奴から盗むこと。それがいい訓練になる。

落語なんか特にそうで、他人の噺や所作を芸の栄養として取り入れて、それで得た力を使って、違う新しいものを生み出す—この一連のサイクルは、マニュアル化されたものではないから、教えられるものじゃないけど。

他の芸人の芸を見て、「俺もあの技をやってみよう」と盗む。それを「盗みました」とは死んでも言わないけど、盗まれた方からすると、「あれ、あいつおいらのやり方を盗んだな」ってすぐわかる。運動選手がドーピングで捕まるようなもので、ひとつ間違えると「盗作」とか言われちゃうから、その案配は難しい。

でも、芸に特許があるわけじゃない。周りに「あいつ勉強したんだな」と思わせれば勝ち。盗んでただ同じような芸をするのではなく、それを自分のものにして、いかにオリジナルを超えていくか、超えちゃったら、その時点でもうそいつの芸だから。

だから何を盗むか、というのは、芸人として問われるべき大事なセンス。

あまり大まじめに語りたくないけど、これだけは確かに言える。

自分が盗むべきものは何か、何を上手いこと取り入れるか—

とりあえずはそれだけを考えておけばいい。(78 ペ)

*

○…「人生最大の失敗は何ですか？」なんて質問をたまに聞かれることがある。

それを聞いてくる奴は、おいらに「FRIDAY 事件」や「バイク事故」のことを語らせ

たいのに決まっている。

けれど、とっちも“失敗”かと思ったら、結果的には妙に箔が付いちゃった。

同じことをやって箔をつけようと思っても、意識してできることじゃない。

だから若手にはよく「お前らはおいらに勝てるわけがない」と言うんだ。

逮捕されたことのある芸人も、前科のある芸人もほとんどいない。いたとしても女子高生の制服盗んだとか、飲酒運転で捕まったとか、しょうもない奴ばかり。

それに加えて、死にかけた奴がどれだけいるのか。

その二つだけでおいらには絶対勝てない。

悔しかったら、警察に捕まってみろ。それから、死にそうになって心臓移植して奇跡の生還でもしてみろ。

もちろん、それで芸人として消えていったら意味がない。

その上で、七十歳になってもテレビのレギュラーを七本やって、CMにもじゃんじゃん出て、映画を撮って、フランスで勲章をもらってみなさい。

それで初めておいらに勝てる。

結局、失敗と成功というのは、背中合わせのところがあるんだ。

大失敗と思ったことが、後になってひっくり返る可能性だってある。もちろんその逆もしかり。

この世界というのは単純なようだけど、実はそんなにわかりやすくはできていない。例えば、「暴力がいけない」というのは全くの正論だろう。けれどそれがひっくり返って、暴力によって平和がもたらされることだってある。建前や理性だけでは説明のつかないことが、往々にして起こるのが人生というもの。

つまり、世の中には、失敗してみないとわからないことがたくさんあるんだよ。

おいらの場合は、お笑い芸人だからそれが許されたところがある。真似して暴力行為や自殺行為をしても、それはただのバカ。

別に宗教を信じているわけじゃないけど、どうしても流れでそうなったとしか言いようがないところがある。簡単に言えば、結果論。

その結果論を自分で受け入れて、今ある自分を良しと思うところから始めないと、いつまで経っても置かれている状況に満足いかない日々を過ごすことになる。(179 ペ)

*

○…なんでそんなにしつこく「結果論」なんて言うかという、おいらがずっと負けた、負けたの繰り返しで、最終的に「なるようにしかならない」と思ったのが大きい。

ペンキ屋の貧乏な家に生まれて、「うちはなんでこんなに貧乏なんだろう」ってずっと思っていたけど、それはおいらが悪いわけじゃないし、「しょうがねえなあ」と思うしか

ない。野球が好きだったけど身体が小さくてもものにならないと思っていたし、勉強もそれでトップを取れるほどのものじゃなかった。

ずっと負けっぱなしだった。

そうすると自ずと吐（つ）いて出てくる言葉は「しょうがねえなあ」になって、それが身についてくると、あまり物事に固執しなくなる。「何かになりたい」「意地でもやってやる」というよりは、人生には流れみたいなものがある、「ダメなものはダメだから、しょうがねえなあ」と思うようになった。

だからといって完全に開き直っちゃって、何をしてもいいんだ、となると、それはちょっと違う。

芸人になった理由も同じ。何度も言うように、なりたくてなったのではなくて、「しょうがねえなあ」の行き着いた先が芸人だった。

ただ、昔から感性だけは自信があった。

これは面白い、面白くないというのは不思議とわかったんだよね。ガキの頃からよくラジオで落語やなんかを聞いていたから、そのあたりのベースはあったんだろうとは思う。

それで芸人になった。

なったらなつたで、今度は「しょうがねえなあ」では済まされない世界。当然、誰が一番売れるか、誰が一番面白いかの競争が始まる。

そこで「負けてもしょうがない」とは思わなかった。

初めて、勝とう、勝ってやろうと思った。

スタートラインはそこなんだ。

「しょうがねえなあ」で終わらせたくないことに、初めて出会ったのかもしれない。

それで今に至る一というわけ。

それが実感としてあるから、「もう一度生まれ変わったら何になりたいですか？」なんてバカな質問には、「もう一回生まれたいわけないだろう」って答えるしかない。

生まれ変わってやりたいものなんて何もない。

人生は一回経験すれば十分なんだ。(181 ペ)

＊

単純に「ああ、面白かった」という読後感。でも、ただ面白おかしいだけのギャグだけではなくて、上達論や人生論が程よく含まれているところが素晴らしいと思った。

◎アレックス・ラインハート著・西原史暁訳『ダメな統計学—悲惨なほど完全なる手引き書—』（勁草書房・2017年）（私物）

PR誌「これから出る本」で出版を知って購入。しばらく「積ん読」状態に。私には理解することが難しかった。私のせいかと思ったら、Amazonのレビューを見てみると、そうでもなさそうだということが分かった。タイトルからして、ちょっと…という事情があるらしい。「本買えば偶にこういうこともある」。

◎和田哲哉著『「頭」が良くなる文房具』（双葉社・2017年）（私物）

現在発売されている文房具のうち、筆記用具、ノート、手帳、ふせん、ファイリング用品、デスクアクセサリ等について、その効率的な使い方をあえてほとんど文章のみで紹介。初心者向けとはいえ、よく読むと高度な情報処理術を説いている。しかしながら、まねしてみたいと思うほどでもなかった。これを読んで、「面白い」と思った人が自分なりに真似すれば良いという程度の内容。キミにはすぐに篠ノ井高校の図書館へ行ってもらおう。

◎石黒マリーローズ著『聖書でわかる英語表現』（岩波新書・2004年）

表紙表見返しの紹介文を引用。

衛星放送の英語ニュース、英字新聞の見出しなどの意味が日本人に伝わりにくい原因の一つは、聖書やキリスト教の慣習にちなんだ表現が含まれていることにある。本書は、最新の英語圏のニュース・映画に登場するこれらの表現を生き生きと解説し、より深く英語を理解するための鍵を提示する。英語表現索引、キリスト教祝祭日一覧付き。（引用以上）

*

通勤電車の中でザッと流し読み。日常で触れる機会がある英語表現の背景に『聖書』の言い回しや、キリスト教の諸行事の持つ意味が反映されることが頻繁にある…ということを知っているだけでも、英語の表現の背景にまで注意を払うゆとりが持てるので、プラスになると思う。

この本は篠高図書館で直観的に「おもしろそうだ」と思って借りてみたのだが、読む機会を逸していた。ところが、最近、増田伸夫さんが「right」という単語についての問題意識を持つようになったことを知り、この本に何かヒントになることがあるかもしれないな…と思って読んでみた。

結果としては、何もなかった。だが、おかげで、ザッと目を通すことができたという成果が得られた。結果としてこういう読書法もアリかな…。

◎小木曾健著『11歳からの正しく怖がるインターネット』（晶文社・2017年）

さりげなくすごいことが書いてあった。

…パソコンがスマホに替わり、さらに身につける端末（メガネ・コンタクト型、脳内埋め込み型！）に変化する。私たちが「今よりもっとネットにつながって、もっと簡単に情報を取り出せる」、そんな時代がもうすぐやってきます。未来っぽく感じられるかもしれませんが、これはあと数年で必ず始まる近い未来の話です。

つまり、知識をいつでも取り出せるのなら、わざわざ覚えていなくてもよい、「知っている」とか「覚えている」ことが、あまり評価されない時代がやってくるということなんです。

一番大きな影響を受けるのが「学校教育」でしょう。

だって、わざわざ覚えてなくても、年表だろうが元素記号だろうが、指一本動かさずに目の前に表示されるんですよ。学校で教える内容に大きな変化が起きるのは確実です。情報を手に入れる「テクニク」と、その情報を発展させる「応用力」を伸ばす、鍛える、そんな学習内容に変わっていくでしょう。

ですが、その新しい世界も、万が一インターネット通信が停止でもしようものなら、大混乱に陥るハズです。なにしろネットが切れた瞬間、みんなの頭の中が空っぽになるんですからね。なんとも恐ろしい話に聞こえますが、実際は今だって似たようなモンじゃないですかね。万が一、すべての電気が止まったら……ね。その時の混乱はネットの比ではないでしょう。

それでも、ネットが止まったくらいで頭が空っぽになるのも困るので、今度は、ネットで得た知識を保存しておくための、専用のメモリーを頭に埋め込む、なんていう人たちが出現するかもしれません。人間がどんどん SF の世界に近づいていくワケです。小さい頃に想像した未来が、ずいぶん早くやってきたなあ……つくづくそう思います。

(201 ペ) (柳沢注：これは「言い過ぎ」の面もあるが、7割程度当たりだと思う。ただし、牧さんの座談のような名人芸を一度経験してしまえば、知識を勉強しておくことの大切さは、どんな世の中になっても否定できなくなるはず。結論として、これからの学校がもし存続するとすれば、「学ぶべきコト」を教えるのではなく、「学び方」を教えることをメインにしていくしかないと今の私には思われてならない。いずれにしても **19 世紀・20 世紀的な学校は急速にその使命を終えつつある**という感慨を深くしている)

*

メモもう一か所。次に引用。

[フェイスブックとツイッター] …両者の違いをスパッとわかりやすく一発で説明すると、

フェイスブックは「カラオケボックスで熱唱」

ツイッターは「ストリートで熱唱」

もうコレに尽きます。カラオケボックスに行くのは、友だち同士、仲間うちですよ。何か歌えばちゃんと見てくれるし、ノッてくれるし、拍手もしてくれる。時々ドアの外を人が通り過ぎたり、のぞき込んだりすることはあっても、知らない人がドカドカ入ってくることは、まあ、ほとんどありません。これがフェイスブックです。

一方ツイッターは、もう完全に外、ストリートでギター抱えて熱唱です。友だちも見に来てくれるけど、まったく知らない人たちもたくさんいます。ほとんどの人は、演奏の横をただ通り過ぎるだけ。たまに面倒くさそうな酔っ払いが絡んできたり、ガラの悪い連中がヤジを飛ばして来たり。でも、素晴らしい曲を書いて良い演奏ができれば、もうあっという間に大観衆が集まってきて絶賛！ ブラボー！ これがツイッターです。

うーん、なんか我ながら、かなりウマく説明できた気がします。(111 ペ) (柳沢注：確かに、これはとてもわかりやすい説明だ)

*

むやみに怖がるのではなく、全く怖がらないのでもない「正しく怖がる」という姿勢は何事にも大切である。牧衷さんはたしか、「大胆かつ細心であれ」と言っていた。

◎檜田秀樹著『リニア新幹線が不可能な7つの理由』(岩波ブックレット・2017年)

よく読むと、リニア新幹線を頭から否定する内容でもない。ただ、「もくじ」には次のように書かれてあり、いずれも大きな問題であることは間違いない。

- 難問1 膨大な残土
- 難問2 水涸れ
- 難問3 住民の立ち退き
- 難問4 乗客の安全確保
- 難問5 ウラン鉱床
- 難問6 ずさんなアクセスと、住民の反対運動
- 難問7 難工事と採算性

*

私自身は、運転士が乗っていない乗り物にはとにかく乗りたくない。責任者不在の乗り物に命を預けるのはゴメンである。いろんな組織もネ。

本書の説く論旨は巻末の次の記述にあるとおりである。誰もが頷くことができる極めて普遍的なものであると思った。昨年末に話題となった「談合問題」などとも合わせて、今後の動きを注視していきたい。

*

「必要なのは、一つ一つの課題を、JR 東海、国、自治体、沿線住民、有識者が、最悪の場合を想定して、真剣に話し合う国民的検証です。そうすれば必ずミスは少なくなるのです」(橋山禮治郎氏・『必要か、リニア新幹線』などの著者)

その検証は、現在、裁判という場に委ねられることになったが、裁判の勝敗ではなく、リニア計画の本質が一人でも多くの国民に周知され、同時に、今後の大型開発事業では裁判に頼ることなく、住民と事業者との真摯な話し合いでその方向性を位置付けることが定着するような礎となる闘いになることを願うばかりだ。(63 ペ)

◎村上信夫著『帝国ホテル厨房物語—私の履歴書—』(日本経済新聞社・2002年)(私物)

日本経済新聞の名物コーナー「私の履歴書」連載をもとに編集されたと思われる。淡々とした筆致の中に生命力があふれている非凡な本。すばらしい。気になった部分を引用して勉強する。

○気を利かせて段取りを考え、精力的にこなしていく。これが十二歳で社会に出て、料理一筋の修行で心と体に染みついた行動原理なのだ。(16 ペ)

○翌年(1939年・昭和14年)の二月、今度は新橋駅前の「第一ホテル」の調理場に入った。幻に終わった戦前の東京オリンピックを当て込んで、「東洋最大」

◎島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』(講談社+α文庫・2017年)(私物)

◎左巻健男他著『理科の実験安全マニュアル』(東京書籍・2003年)

◇次回以降の予告

◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』(クロスメディア・パブリッシング・2016年)(私物)

◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』(仮説社・1987年)(私物)

◎^{たくきよしみつ}鐸木能光著『シンプルに使うパソコン術』(講談社ブルーバックス・2007年)(私物)

◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』(ちくま文庫・1992年)(私物)

◎星新一著『気まぐれ指数』(新潮文庫・1973年)(私物)

◎^{かつべみたけ}勝部真長著『上に立つ者の論理』(PHP文庫・1994年)(私物)

- ◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
(日経 BP クラシックス・2010年)(私物)
- ◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』(光文社新書・2011年)(私物)
- ◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』(平凡社ライブラリー・2017年)
(私物)
- ◎西鋭夫著『國破れてマッカーサー』(中公文庫・2005年)(私物)
- ◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』(河出書房新社・2013年)(私物)
- ◎植田康夫著『編集者になるには』(ペリかん社・1994年)(篠高図書館廃棄本)
- ◎立川談志著『努力とは馬鹿に恵えた夢である』(新潮社・2014年)(私物)

◇まとめ・つぶやきなど

○すべての本は、この世界を泳ぐための「攻略本」であるといえる。

○「学問と私」についてのメモ。生徒の質問を受けていると、「ボクのために学問がある」と思い込んでいる生徒がいることが分かる。これでは生徒は進歩しないと思う。学問の束縛を受け入れ、その束縛に順って進歩することが必要だと思う。また、別に、「学問にとらわれすぎてしまって、がんじがらめになっている生徒」に出くわすこともある。これも望ましい状態ではない。こういう生徒には、「キミが学問のために存在するわけではないのだよ。学問がキミのためにあるのだよ」と諭してあげたくなる。以上の現象を一般化すると、「人間のために学問がある」と考えること、および、「学問のために人間がある」ということのバランスが大事だということ。これは自明のことだろうか。書いてみると、かなり奥深い内容を含んでいるように思われる。[以上、12月15日(金)15:50]

○ある学校で生徒会長が「校則を変えよう」と言い出した。校長はちょっとイカレているから、先生たちはみんな距離を置いている。そうして、生徒たちに対しては「職員会が困らない範囲で自由にやって良し」と考えている。一般生徒は「先生たちはいったい、どうしたいと思っているのだろうか?」と忖度を始めた。はい、今のどこかの国はこういう状態だね。「校則」はじつは二の次。大事なものは「主導権」なのだ。[12月21日(木)13:20]

○信濃毎日新聞の「やまびこ」(三行コント)を思いつく。「再発防止策/正しい場外乱闘、教えます/—プロレスラー/力士・親方どの/(埴科郡・小太郎)」これをハガキに書いて投函した帰り、図書館に寄って新聞を見たら、べつの作品も思いつく。「貴ノ岩へ/痛みに耐えてよくがんばった/—貴乃花親方/(埴科郡・小太郎)」[12月22日(金)13:30]

○上の「やまびこ」の姉妹作品。信毎柳壇へ久しぶりに投句。「痛みに耐えよく頑張った貴ノ岩」〔12月22日（金）帰りがけに投函〕

○センター試験に向けて化学の講座の生徒に言いたいことをメモする。「どれをマークするにせよ、自分の意志で決めよう。そうすれば、その結果に責任を取る覚悟ができる。そうすれば、合ったときには、うれしい思いが鮮明に残り、間違ったときには悔しい思いが鮮明に残る。どちらにしても勉強が身につく。記録も正確に取れる。経験上、結果がよい生徒ほど、何をマークしたかの記憶が鮮明である。自分で決断して、それについて責任を取る覚悟ができているからだ。この姿勢は、人生すべてに通ずる大事な姿勢なのではないか。〔12月22日（金）16:18〕

○朝刊に目を通して「三行コント」を思いつく。「イージス・アショア／いいです、多少は…／—小野寺防衛相／（埴科郡・小太郎）」〔12月24日（日）早朝、テクノさかき駅ポストに投函〕今年最後のTBS「サンデーモーニング」を観た後、コーヒーを飲みながらケイタイより転記。

○数日前に書いておいたメモから転記。石灰シリーズ化学式について定型句で学ぶ。「石灰岩はカコサン（ CaCO_3 ）で、生石灰はシーエーオー（ CaO ），消石灰はオーエイチ 2 コ〔 $\text{Ca}(\text{OH})_2$ 〕。〔12月24日（日）10:30〕

○この項は、上田仮説サークルホームページからの転載。消してしまうのがもったいなかったの…。

right（正しい）はなぜ右なのか - 増田伸夫

2017/12/21 (Thu) 17:23:42

英語の right（正しい）は、なぜ「右の」なのか。それがわかったような気がしている。そこで問題（少し早いクリスマスクイズ）です。

【問題】英語の right（正しい）は、なぜ「右の」でもあるのでしょうか。思いついたことがあったら出し合いましょう。

*

この疑問は私が山我哲雄著『キリスト教入門』を読んだ時から抱いていたものです。そこでは、再臨のキリストが「羊は右に、山羊は左に置く。そして右側にいる人たちに、<神に祝福された人たち>と呼びかけ」ている（マタイによる福音書）。でもその時は right（正しい）と右がきちんと結びつかなかった。でも、よ〜く考えれば、聖書にそのような記述があるのだから、右は正しい（right）でなければいけないはずだ。そこで、英語の辞書（大修館）で right を引いたら、「right の原義は右で、聖書の「知恵者の心は右にあり」から「右のほう（右側／右手）」は「正しい」という連想が生まれた」と書い

であった。その後、ネットでも調べてみたら、そのような解説が書いてあった。right はもともと<右>の意味で、聖書の記述から転じて<正しい>となったのだ。

なお、right には<権利>という意味もあるが、これについては橋爪・佐藤共著『あぶない一神教』で橋爪が「自然も人間も神が創ったのだから、人間の罪（原罪）を肯定してはいけないにせよ、自分を正当化してもいいのではないかと考えた。それが right（権利）だ。人間が生まれながらに持っている自然権。神から自分に与えられた自然を正当化してもよい。この正しさを権利という」と説明している。だから right は、右→正しい→権利となったと考えられる。私としては、これですっきりしたのですが、皆さんはどうでしょうか。

Re: right（正しい）はなぜ右なのか - 柳沢克央

2017/12/22 (Fri) 21:03:31

増田さん、面白い仮説だと思いながら読みました。キリスト教関係者やキリスト教の理解が深い人に質問してみると面白いことが分かりそうだと思います。

ちなみに、私は明日、東北信高校選抜オーケストラのヘンデル「メサイア」演奏会（ホクト文化ホール）に行き、ジョージ1世時代の英国に思いを馳せながら鑑賞してこようと思っているところです。…たしか、去年の今頃、『メサイア伝説』の本を読んでいた。

Re: right（正しい）はなぜ右なのか - 増田伸夫

2017/12/23 (Sat) 08:37:52

柳沢さん、「ハレルヤ」では聴衆は立ち上がるでしょうか。

【問題】ヘンデル「メサイア」演奏会の「ハレルヤ」では、長野の聴衆もスタンディングオベーションしたと思いますか？

<予想>アほぼ全員起立した　イ半数くらいが起立した　ウほとんど起立しなかった

*

私の予想は、なんとなく「イ」です。結果報告をお願いします。

Re: right（正しい）はなぜ右なのか - 柳沢克央

2017/12/23 (Sat) 18:34:33

結果報告をいたします。聴衆の入りは約半分でした。演奏は素晴らしかったです。長野県の高校オーケストラおよび合唱団は全国に誇りうる非常に高いレベルにあると思いました。

「ハレルヤ」は全曲の中で五分の四ぐらいの時に演奏されます。時間の都合でカットされた曲がかなりありましたが、全体の流れは保たれていました。

普通のコンサートでは全曲が終了した時点で拍手になりますが、今日のコンサートでは、「ハレルヤ」が終わった後、盛大な拍手になりました。昨年と同じような展開だったかと記憶しています。二階席で聴いていた私の周りで立った人はいませんでした。確認できる範囲の一階席でも立った人はいませんでした。…というわけで、結果は「ウ」でした。

このような素晴らしい演奏会が無料で聴けるとは、夢のようでした。九州北部地震のチャリティー企画でしたので、演奏への感謝を込めて寄付をして帰って来ました。

きょう、聴いてみて思ったのは、この曲はジョージ一世とキリストを重ね合わせて共にたたえろという、壮大な典礼の意味がたっぷりと込められているということです。英国史をもう一度きちんと読んでみたいなと思いました。right について、気になります。どういう研究があるか、語学から攻めるか、キリスト教関連で攻めるか…いろいろと夢があります。〔12月24日(土) 11:00〕

○私は高校一年の夏休みで読書レポートが宿題になった。未熟だった私は(今もそうだが…)この課題に対して「おざなり」のレポートを提出した。2018年のいま、こうしてメモを書いている私は多分、あのかのときのレポートが「おざなり」だったことが「もの足りない」のだ。そうして、もう亡くなってしまった先生に向けて、こうしてレポートを書き、毎月、毎月、提出している…のかもしれない。〔12月25日(月) 11:03〕

○運動の時に書いておいたメモから転記。「わかること、できること、習熟することはそれぞれ別々のこと。これをよく知った上で教えることが大切」〔12月26日(火) 9:36〕

○別のメモを三つまとめて転記。

…人生は模倣と創造の連鎖である。原子・分子レベルで生命が46億年かかってやってきたことはこれに尽きる。

…江戸時代「切り捨て御免」で亡くなった人はどれくらいいるのだろうか。

慎重に取り扱い始めているところである。広島・長崎に続いて三度目を試すほど、人類は愚かではないはずだ。〔12月26日(火) 9:40〕

○財布の中から落語のプログラムのメモが出てきた。転記して処分する。9月10日(日)第22回立川談慶独演会(上田映劇)演目「ちりとてちん」「妾馬」。談慶公演の口演は好演だった。〔12月26日(火) 9:45〕

○(旅、トイレ掃除、感謝等)修行的なことをすると、良い感覚が研ぎ澄まされる。そうすると、常に良いことが起きているように錯覚するのではないか。

○小川三夫氏の主宰していた宮大工集団・鶴工舎では常に刃物を研ぐ修行を基本として

職人たちを鍛えているという話を同氏の著書で読んだことがある。

○研ぎ澄まされた感覚で物事を処理すると、修行していない人から見ると、とんでもないことをやっているように見えるのではないか。

○良い予想（理想像・良い先入観）を持ち、実現に向けて、それが当たるように行動すれば、運をつかめるのではないか。

○「大成功」を「大成功」と認識できない慢心が失敗のもとになるのではないか。

○失敗の一番の原因は「大成功」を「大成功」と認識できないことなのではないか。

○「仏教の修行をしているとき、線香の灰が落ちる音が雷が落ちるように聞こえることがある」という話は、感覚が鋭敏になることとも密接に関連しているのではないか。

○西田文郎『10人の法則』（現代書林）掲載の、「お世話になった人10人に会いに行く」という課題を実行してみて、多くの先人に導かれたからこそ、今の自分があることが実感できた。親や先祖10人の名前と生年月日、（没している場合は没年月日も）を調べるとい課題も同時に書かれていた。こちらも全く前者と同様に、今の自分が精妙な命のリレーの流れに乗っているというか、力強い生命力の流れの一部であることに気づかされた。老子の説く「タオ（道）」、仏教の説いた「ダルマ（宇宙の根源）」、マキャヴェリの説いた「ヴィルトゥ（生命力）」、以上三者は全く同じものだと考えて差し支えないのではなからうか。〔以上、12月27日（水）21:40〕

○模試判定の合格可能性というデータの意味が不明である。一生懸命に受験勉強してきた一人の受験生の合格可能性は最高50%、最低でも50%である。結果は合格か不合格かのどちらかである。どんなに優秀でも入試で油断すれば不合格になる。どんなに自信がなくても、実力を出し切れれば合格になる。入試は瞬間的に終わるが、受験は「受験勉強の積分」である。受験生にできることは、模試の判定を見て一喜一憂することではない。それは、わき目も振らずに一生懸命に受験勉強の作業を誠実に進め、平常心で入試に臨むこと、それだけであるはずだ。〔12月28日（木）14:06〕

○初対面の時、相手に圧倒される印象を持ったことがある。見抜かれているというか、かなわないというか、そういう感覚である。これがなぜ起こるのか、理由が少しわかった気がするのでメモしておく。つまりは相手と自分との情報処理の量と質とが圧倒的に違うのではないか。自分はわずかしか相手から読み取れないのに、相手は自分から多くの情報を引き出している…というような現象。これはつまり、相手と自分とのそれまでの経験の積分の差によるものだと思われる。歴史的背景があるか、ないかの違い。〔12月29日（金）15:31〕

○今朝、トイレ掃除をしながら気づいたこと。トイレ掃除に限らず掃除は運気を上げる。理由は、注意力や精神状態の向上。きれいにするという目的に向かって、知覚を総動員

することにより、精神状態が向上する。服装、作業の手順、作業時間、道具の扱い等々、注意すべきことは盛りだくさんだ。作務を重要な修行と位置付けて取り組んできた寺院関係者に敬意を表したい気持ちになる今朝の私であった。〔12月29日（金）20:55〕

○クリックは「射精」に似ている。〔12月30日（土）11:39〕

○新年から眼鏡を着用する。準備は昨年12月下旬に完了。

○大相撲は①日本の伝統を日本人以外の者が多くを担っている。②スポーツであり、神事である。③法人でありながら、掟に基づいた運営。一ザッと思いつくだけでもこれら三点の自家撞着（自己矛盾）におちいつている。

○昨秋の大相撲騒動は、きだみのる著『にっぽん部落（ムラ）』（岩波新書）にある「ムラの掟」から解説可。①刃傷するな。②他人の家をつん燃やすな。③盗人するな。④部落の恥を外にさらすな。四章のうち、貴乃花親方は④を破ったから「ムラ八分」なのだ。④は翻訳すると警察に通報するなということ。日馬富士が①を破ったので引退したのは当然のこと。弱いものいじめはよくないこと。

○テレ東『孤独のグルメ』面白い。「ドラマは人間を描くものだ」という先入観を軽く、しかし、鮮やかに打ちのめされた心地よさを感じず。〔以上、1月2日（火）14:40〕

○今朝、明確に認識した。日本は法治国家の体裁を装った無法地帯だ。現政権の抱える問題、大相撲問題、福島原発事故後の状態、以上全てが日本が無法地帯である何よりの証拠だ。反論を待つ。現在の日本は潜在的に「万人の万人に対する闘争」＝「自然状態」にあることを認識し、自分の将来を真剣に考え、行動した者が生き残る。〔1月4日（木）4:17〕

○川柳（日馬富士問題で貴乃花親方理事解任・式守伊之助がセクハラ騒動）「軍配も勝負も土俵の上が良い」

○「へソ曲がり」と「つむじ曲がり」は似て非なるモノである。「へソ曲がり」は、腹を立てやすい人＝怒りん坊。「つむじ曲がり」は普通とは変わった発想をする人。両者を混同すると、へソ曲がりからは怒られ、つむじ曲がりからは歓迎されるのであろう…。

〔以上、1月7日（日）13:12〕

○週刊文春「川柳のらりくらし」に投句。お題は「発見」。「電話かけスマホ鳴らして見つけ笑む」。〔1月8日（月・祝）16:56〕

○日馬富士へ「弱い者イジメはよくないね」。貴乃花親方へ「やっぱりムラの恥を外にさらすと村八分だよ。意固地になると、色々と良くないよ」。貴ノ岩へ「痛みに耐えて、よく頑張ったね」。八角理事長へ「いろいろと発覚して大変だね～。ムラオサだから頑張ろうね」。

○昔は「街の中に店があった」。今のショッピングモールでは「店の中に街がある」んだ

よね。こういう発想の転換は他でも応用できそうだ。

○力士が土俵の外で闘うようになったら、立行司まで勝手に土俵の外で妙な活躍をするようになってしまった。

○ツイッターに「俺は安定した天才だ」と書き込む男がいたとする。誰もがこの種の男に対してだいたい同じ感想を持つ。ところで、話は全く変わるが、アメリカ大統領の名前はトランプである。〔以上、1月9日（火）14:06〕

○化学の場合、東進ハイスクールの講評が速報性高く便利。河合塾、駿台は平均点の予測のみ参考とする。解法解説は城南予備校のサイトが洗練されており、簡潔で便利。〔1月15日（月）朝8:00頃〕

○川柳二句を信毎柳壇に投句。成人式の貸衣装会社「はれのひ」について。川柳を電車の中で思いつく。「無い袖は振れぬ」で済むか晴れの日／はれのひに袖にされても晴れの日だ。

○成人式に晴れ着が着られなくなってしまった人は気の毒だが、約束を守ってもらえなかった人の気持ちがよく分かった、という点では貴重な経験かもしれない。「騙すより騙されるほうが救われる」のではないか。宇宙に貸しをつくったのだと思えばいいのかもしれない。

○三行コント「やまびこ」応募。「ミサイル」誤警報／確かに訓練ではなかった／一ハワイ住民／（埴科郡・小太郎）〔以上2通、1月15日（月）午前投函、午前中から図書館で悠々と朝日新聞を読む。サークル例会用の紹介コピー作成。きょうはセンターリサーチの日〕

○ミサイルが飛んできては困るのだが、「たとえ、いまミサイルが飛んできたとしても、悔いの残らぬように生きよう」と思えば、誤警報だって人生の糧になることもあるのではないか。「論的は恩人」に近い教訓が引き出せる。

○人はいつからいつまで生きているか／——「人に会えるようになり、人に会えなくなるまで」＝「眼を開けてから、眼を閉じるまで」生きている、と言えるのではないか。「人に会う」ことは「与える」ことであり、「引き出す」ことでもある。一日が一生の縮図。生徒の学校生活、教師の学校生活も同じこと。登校から下校まで。出勤から退勤まで。

○手書きメモ転記。山本夏彦氏がテレビ番組「徹子の部屋」で生前言っていた諺を思い出す。「十読は一写に如かず」（十回読むよりも一回写す方がためになる）。「読書メモ」はひたすら写すことに主な意味がある。著者の思考のプロセスが乗り移ってくる…はずであるし、…実際に乗り移ってくるような気がする。

○センター試験の得点は良い点数でも悪い点数でも、それが君にとっていちばん大切な

点数。必要な点数。どんな点数であっても、結果を受け入れて前に進むことが大切。このことを拡張敷衍すれば、色々なことにあてはまる。「勝ちに不思議の勝ちあり。負けに不思議の負けなし」（野村克也）

○高得点をとる生徒は疲れを知らないことが多い。模試やセンター試験が終わっても、ケロッとしていて、明日も試験が続いていたとしても対応可能。低得点の生徒はその逆。このことから得られる教訓は「元気が大切」ということか。

○テストの点数が低い生徒によく見られる現象は次のとおり。どこか他人事である。ノートを進化させることを知らないのか、しないのか、はつきりしない。センター試験が自分の身に起こる重要な出来事だとは思っていない。でも、近づくとなぜか緊張する。準備が遅い。遅くてもそれで良いと思っている。いつなのかよく分からない日に、誰か他人が、どこか遠くでボクの進学先の試験を受けて、なぜかわからないけれど自己採点が不正確。それでもあまり困った風もなく、他人に選んでもらった大学を、さして調べもせず、とりあえずたくさん受験して、どこか引っかかったところに親から言われて進学する。就職先も、交際相手も、この調子で選んで、それでも特に困らない。…それも自由。私はなぜかこういうタイプの生徒には本気で声をかけなくなってしまふ。熱心な生徒の相手をしていた方が楽しいからだ。職員にもこういうタイプの人がいる。私と話すよりも、スマホをいじっている方が楽しいようだ。人生いろいろ。〔以上 1 月 15 日（月） 15:30〕

○仮説実験授業研究会とは

仮説，実験，授業，研究，会である。

まず、「こうではないか」と想像（創造）し、

実際に試してみ、

結果を社会的に広く伝え、

その結果をフィードバックして考える。

そして集まる。

その場でまた「こうではないか」と想像し…

これを繰り返すことにより、科学的認識を大衆に広く伝えていく。〔2018 年 1 月 16 日（火） 15:15〕

○山本夏彦去って、島地勝彦顕る。

○マルケヴィッチとマゼールは鬼才。ベームとザンデルリンクは親方。ヨッフムは名匠、ハイティンクはその弟子。クナッパーツブッシュとマタチッチは巨匠。メンゲルベルク・セル・ショルティは調教師。チェリビダッケは神業師。カラヤンは軽薄才子，小澤はその弟子。アーノンクールは快男児。バーンスタインは冒険家。ヴァントは細工師。マリ

ナーとコリン・デイヴィスは庭園職人。

○ヘルマン・クレバーは「友達以上，恋人未満」＝「別格の名コンサートマスター」。

○世界における日本の名人の特質は「相手の力を利用して相手に勝つこと」＝「柔よく剛を制す」にあるのではないか。

○曲は節回し。節回しはレトリック。人（作曲家・文章家）は委曲を尽くして訴える。

〔以上，1月17日（水）10:50〕

○USBには寿命がある。個々に容量が決まっている。ときどき情報が壊れることがある。定期的にコピーをして情報を書き移してやる必要がある。…等々。心臓部はただの無機質な物体であるはずなのに，どうしてこんなに人間的なのだろうか。〔1月17日（水）

16:45〕

○「予定時刻となったので」「本稿はこれで打ち留め印刷へ」。「最後までお読み下さりありがとうございます」。「いますぐに次の仕事に取りかかる」，「新年も〈読書と思索〉楽しもう」。〔1月19日（金）15:30 脱稿〕